

京	都	府
1・18～19 谷口香嶮塾自邇会展、京都美術倶楽部に開催(猪飼嘯谷「日ざかり」・「笠置落城」、小早川秋声「笑」・「朝」など陳列)。 京都美術 27	6・15 京都図案会、物故会員追悼図案展を六角会館に開催。 京都美術 28	6・15 京都図案会、物故会員追悼図案展を六角会館に開催。 京都美術 28
1・一 黒田重太郎、大阪高島屋の図案部に入る(翌3・6京都に帰る)。 同自伝略稿	6・21 都路華香、市立絵画専門学校助教と華香墨蹟なる。	6・21 都路華香、市立絵画専門学校助教と華香墨蹟なる。
2・一 市染織試験場に色染部増設。 西陣織物同業組合沿革史	6・29 第7回関西美術院、競技会授賞を挙行(終了後、帰国した梅原良三郎は仏国土産話をす)。 京都美術 28	6・29 第7回関西美術院、競技会授賞を挙行(終了後、帰国した梅原良三郎は仏国土産話をす)。 京都美術 28
3・2～3 桃花会絵画展覧会、大雲院に開催(榊原紫峰「野梅」・「麗」、平井棟仙「宮公」・「黄河」、星野空外「入江の晨」など出品)。 京都美術 27	6・一 梅原良三郎、仏国より帰国。 関西美術院歴史概要	6・一 梅原良三郎、仏国より帰国。 関西美術院歴史概要
3・15 図案東山会第1回展、染物組合事務所で開催(同会は染物組合模様部々長田畑辰太郎らの発起で徒弟の図案絵画研究の団体として起ったもの)。 西陣史	6・一 西村五雲、市立美術工芸学校教諭となる。 塔影 4:12、五雲	6・一 西村五雲、市立美術工芸学校教諭となる。 塔影 4:12、五雲
3・21 早苗会第9回展、岡崎勸業館に開催(川村曼舟「静寂」、山下竹斎「花の山」、林文塘「枇杷」、榎本一洋「渚」などを出陳)。 日出 3・22、23、京都美術 28	7・5～6 後素協会小品画展、京都倶楽部に開催。 京都美術 29	7・5～6 後素協会小品画展、京都倶楽部に開催。 京都美術 29
3・一 高島屋、ア・ラ・モード陳列会にかわって、染織物の春秋の流行発表機関として百選会を設立、第1回展を同店に開催(丹羽圭介、神阪雪佳ら審査員として活躍、顧問として中井宗太郎、菅原教造、和田三造、与謝野品子らも招かれる。昭14、64回展を開く)。 高島屋100年史	7・7 高島屋、同店関係の美術工芸家追悼遺作展を開催(画家 岸竹堂、和田矩行、小沢文隆、安達真速、友仙 村上嘉平、早川久兵衛、刺繍 確井増次郎、加藤辰之助、加藤鉄次郎、縫 長谷川治兵衛、天鷲絨 駒井定七、織物 佐々木清七、伊達弥助、小谷孫兵衛、壁織 中村うの、悉皆 伊藤清兵衛、和田武助、下絵彩色 小野村千太郎、綴通 錦宇兵衛、御召 吉田伊助、裁縫 林徳兵衛、絹織物 奥野竹次郎)。 同上	7・7 高島屋、同店関係の美術工芸家追悼遺作展を開催(画家 岸竹堂、和田矩行、小沢文隆、安達真速、友仙 村上嘉平、早川久兵衛、刺繍 確井増次郎、加藤辰之助、加藤鉄次郎、縫 長谷川治兵衛、天鷲絨 駒井定七、織物 佐々木清七、伊達弥助、小谷孫兵衛、壁織 中村うの、悉皆 伊藤清兵衛、和田武助、下絵彩色 小野村千太郎、綴通 錦宇兵衛、御召 吉田伊助、裁縫 林徳兵衛、絹織物 奥野竹次郎)。 同上
3・一 入江波光、市立美術工芸学校教諭となり、川村曼舟の実習をたすける。 日本美術年鑑 昭22-26、入江波光展目録	7・20 第10回契陶会展、陶磁器試験場に開催(受賞者:高橋清山、伊東陶山、清水六兵衛)。 同上	7・20 第10回契陶会展、陶磁器試験場に開催(受賞者:高橋清山、伊東陶山、清水六兵衛)。 同上
4・1 西本願寺蔵品第1回入札が行なわれる(第2回4・25、第3回5・6)。 京都美術 28	7・29 蒔絵師 杉林古香没(享年33)。 美術新報 大2・10	7・29 蒔絵師 杉林古香没(享年33)。 美術新報 大2・10
4・1～5・20 第18回新古典美術品展覧会、 ⁽¹⁾ 岡崎勸業館に開催(近年絵画の出品数が減少し、著名作家の二、三を除き出品をみなくなる)。 同上	8・6 中沢岩太、陶磁器試験場で今回開設の農展の意義につき演説。 京都美術 29	8・6 中沢岩太、陶磁器試験場で今回開設の農展の意義につき演説。 京都美術 29
4・一 小川千鶴、欧州留学のため出発。 関西美術院歴史概要	8・一 沢部清五郎帰国(9月関西美術院囑託として教授する)。 関西美術院歴史概要	8・一 沢部清五郎帰国(9月関西美術院囑託として教授する)。 関西美術院歴史概要
5・4～11 フェウザン会、第2回展を府立図書館に開催(終了後大阪にても開催、のち解散する)。 京都美術 28	9・16 日本画家 望月玉泉没(天保5・6・14生、享年80、真如堂に葬る)。 京都名家墳墓録、絵画叢誌 315、京都美術 29	9・16 日本画家 望月玉泉没(天保5・6・14生、享年80、真如堂に葬る)。 京都名家墳墓録、絵画叢誌 315、京都美術 29
5・16～18 いざよひ会、浅井忠遺墨および会員絵画展を府立図書館に開催。 同上	9・29 太田喜二郎、欧州より帰国、住居を下京区中筋道大宮西入りに定める。 美術新報 230	9・29 太田喜二郎、欧州より帰国、住居を下京区中筋道大宮西入りに定める。 美術新報 230
5・一 3代川島甚兵衛、オランダの平和殿を飾る綴錦の大壁掛「花鳥図」を完成(これは2代在世中より引きついで製作されたもの、原図作者は菊池芳文、山田耕雲ら、また7月浅井忠原図の綴錦「狩場の図」も完成、宮内省に上納する)。 川島家と其事業	10・5～14 梅原良三郎、帰国後初めての個展を東京神田三崎町に新築されたヴィナス倶楽部に開催(主催白樺社、作品「モレー風景」)。 現代の洋画 18	10・5～14 梅原良三郎、帰国後初めての個展を東京神田三崎町に新築されたヴィナス倶楽部に開催(主催白樺社、作品「モレー風景」)。 現代の洋画 18
6・6～8 第2回京都陶漆陳列会、農商務省主催にて同省商品陳列館(東京)に開催(これは昨年、従来紹介されていなかった意匠家および製作家を世に紹介する目的で遊陶園・京漆園の作品を陳列したのが好評であったため開かれたもの)。 美術新報 大2・7	10・10～11・5 第12回関西美術会展、第1勸業館に開催(出品総数380点、主なる出品者と作品は次の通り、寺松国太郎「偶作」、都鳥英喜「諸寄村」、伊藤快彦「静物」、沢部清五郎「少女」、田中善之助「秋の広沢」、広瀬勝平「潮風」、加藤源之助「加茂川」、河合新蔵「真夏の山手櫓」、鹿子木孟郎「鶴ヶ岡遺香」、安藤静也「高原」、黒田重太郎「洗濯場」、間部時雄「越前の海岸」、新井謙也「豆こき」、筈尾清「刺繍」、河村蜻山、陶器、辻冬史、小川白楊、内貴舟屋の写真など)。 京都美術 30	10・10～11・5 第12回関西美術会展、第1勸業館に開催(出品総数380点、主なる出品者と作品は次の通り、寺松国太郎「偶作」、都鳥英喜「諸寄村」、伊藤快彦「静物」、沢部清五郎「少女」、田中善之助「秋の広沢」、広瀬勝平「潮風」、加藤源之助「加茂川」、河合新蔵「真夏の山手櫓」、鹿子木孟郎「鶴ヶ岡遺香」、安藤静也「高原」、黒田重太郎「洗濯場」、間部時雄「越前の海岸」、新井謙也「豆こき」、筈尾清「刺繍」、河村蜻山、陶器、辻冬史、小川白楊、内貴舟屋の写真など)。 京都美術 30

参	考	日	本
(1)第18回新古典美術品展覧会 受賞者 1等賞、「紅葉山蒔絵硯附手箱」稲垣和二郎、「唐織女帯」中村半兵衛 2等賞、「暮れつ方木彫」石本曉海、「臙銀壺式 靈芝耳花瓶」平野吉兵衛、「布目御本花瓶」清水六兵衛、「徹宋窯釉花瓶」伊東陶山、「秋草蒔絵手箱」岡本専助、「唐山水蒔絵文台硯箱」戸島光孚、「子日遊蒔絵文台硯箱」木村秀雄、「花袋縮緬友仙」岡本仙助、「唐織女帯」十合重助、「百花模様友仙」北岡玄之助、「花車模様女帯」山田九蔵、「滝模様縮緬友仙」野口安左衛門、「明紗織草花女帯」金田忠兵衛 3等賞、「皴」松村梅叟、「暖き日」石崎光瑠、「蘭亭曲水」富田溪仙、「壁掛図案」伊藤秀峯、「同」福田稔、「織物図案」前田豊秋、「緋銅花瓶」大久保猷興、「無色焼花瓶」河村蜻山、「燕子花蒔絵料紙硯箱」西村彦兵衛、「楨絵蒔絵文庫」吉田平三郎、「螺鈿入卓」三木表悦、「絵替蒔絵吸物膳」奥村享、「菓鶏頭女帯」市田文次郎、「花籠模様縮緬友仙」安藤合名会社、「几張日扇友仙」宮井伝兵衛、「大桜友仙」内藤合名会社、「唐織絵扇女帯」灘吉之助、「唐織女帯」井上七左衛門、「紋綸子鹿の子小葵」河本庄兵衛、「白塩瀬半襟」荒川益次郎、「糸織女帯」熊谷市兵衛、「ハツ橋模様友仙」吉居佐助、「紹唐織女帯」田畑庄三郎、「桐二曲屏風」一瀬小兵衛、「二重編袋形花籠」山田彌三郎、「高砂人形」大木平蔵、「盛籠」森田新太郎、「桑机」石本鏡齋。 京都美術 28	2・14 日本画家 川端玉章没(天保13生、享年72)。 3・3 国民美術協会創立(森鷗外、黒田清輝、岩村透らの発起、会頭黒田、10・10～11・8第1回西部展、大阪天王寺に開く、黒田「磯の夕」、岡田三郎助「髪梳き」など。以後昭2まで東京で毎年開催)。 3・11～30 フェウザン会第2回展、読売新聞社に開催(万鉄五郎「習作日傘の女」、岸田劉生「自画像」など)。 4・1～5・10 日本美術協会第50回展、同協会列品館に開催、5・25～30宗達作品50余点を特陳。 4・7 蘭亭会、東京日本橋倶楽部に開催。 4・一 白樺社主催、版画展覧会を衆議院内に開催し、泰西の名版画を一般公衆に展観。 5・16 佳都美会、大阪出張展覧会を3日間大阪博物館に開催。 6・4～29 日本水彩画会第1回展(大日本水彩画会が石井柏亭らを加え改称)。 6・12～7・8 健筆会、第5回展覧会を上野日本美術協会に開催。 7・25 農商務省告示245号により、図案及応用作品展覧会規程が定められる。(「製作工業品及美術工芸品ニ応用スル図案ノ改善善達ヲ期スル為メ毎年一回図案及応用作品展覧会ヲ農商務省商品陳列館内ニ開ク」が趣旨、出品分類は第1部が製作工業品の図案、第2部が美術工芸品の図案とその応用作品で、2部の内分けは金工品、漆工品、木竹製品、陶磁器類、玉・石・牙・革などの製品、染織刺繍品、彫版および印刷物の7類である)。 7・28 日本画家 奥原晴湖没(享年77)。 7・30 彫刻家 石川光明没(嘉永5生、享年62)。 7・一 日本書道会第3回展、上野精養軒に開催。 8・4 書家 中林梧竹没。 8・一 『現代の洋画』8月号は後期印象派の特集号を出す。 9・2 岡倉天心没(文久2生、名覚三、享年52)。 9・一 日本書道会が主催して官設の展覧会に書道をも加うべきことが建議された。 10・15～11・18 第7回文展、上野竹之台に開催、横山大観「松並木」、寺崎広業「千紫万紅」、竹内栖鳳「絵になる最初」、小室翠雲「寒林幽居」、菊池契月「鉄漿蜻蛉」、藤島武二「うつつ」、石井柏亭「滞船」、長原孝太郎「残雪」。		

京 都 府
<p>10・12～13 佳都美会第7回展、南禅寺金地院に開催（出品者〔陶磁器〕伊東小陶、河村蜻山、宮永東山、清水六兵衛、〔漆器〕岩村貞藏、富田誠、戸島光孚、神阪雪佳、迎田秋悦、江馬長閑、三木表悦、鈴木表朔、〔金属〕古市卯之助、〔指物〕一瀬小兵衛、〔彫刻〕石木曉海、〔装飾画〕山鹿清華、岸本景春、千熊章祿ら）。 京都美術 30、31</p> <p>10・15～11・18 第7回文展⁽²⁾（今尾景年に代り、木島桜谷が今回から査審員となる。土田麦麿「海女」は入選にとどまる。11・24～12・5 京都陳列会を岡崎勸業館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・20 日本図案会、発会式を八新支店に開催（京都の各図案会および無所属中の重なる人々により図案界の弊風を一新する目的で結成、役員を置かず当番制、出席者、高田鶴洲、鈴木紫陽、河村華庭、田村春暁、山鹿清華、福岡玉仙、水上香郁、大八木春暁、上野清江、左近田香雲、馬島春香、中原一紅、川畑契水、岡田紫郊、落合旭仙、片岡北京、下村玉廣、沢田誠一郎、阿原華月、沢渡乾斎、高田一鶴、吉川雅喬、辻松喬ら）。 京都美術 30</p> <p>10・31～11・2 京大・三高の学生・職員から成る三脚会洋画第2回展、京大学生集合所に開催。 美術新報 229</p> <p>10・一 光悦寺住職前田日延、飯田新七、西村総左衛門、神阪雪佳ら發起人となり本阿弥光悦の事蹟顕彰のため光悦会を設立（翌3年の追悼祭典執行、光悦伝記編纂、展覧会開催などの関係事業を計画）。 京都美術 30</p> <p>10・一 梅原良三郎、東京へ移住、赤坂区仲之町23に居を定める。 現代の洋画 19</p> <p>11・11 西本願寺什宝競売。 京都美術 30</p> <p>11・16～20 河合卯之助、内藤琪士、松宮芳年、村上華岳、寿谷梢月ら、試作展を大丸呉服店に開催。 現代の洋画 21</p> <p>11・16～24 現代大家新作展、東京安川大成堂に開催（京都から「孔雀」今尾景年、「源義家」竹内栖鳳、「美人図」上村松園、「柳堤図」木島桜谷）。 美術新報 220</p> <p>11・29～12・3 法書展覧会、府立図書館に開催（山本竟山主催）。 京都美術 30</p> <p>11・一 村山槐多、未来派や立体派をならって唐紙に水彩画を描き、これに木版画を加えて展覧会を開催。 異色の近代画家たち展目録</p> <p>12・18 京都から竹内栖鳳、帝室技芸員となる。 絵画叢誌 318、日本美術年鑑 昭18、museum 202</p> <p>12・21 一閑張細工師 13代飛来一閑没（名、才右衛門、享年55）。 淡交テキスト 茶道具編</p> <p>12・一 牧野克次、論説「高峰博士邸の室内」を『京都美術』に掲載。 京都美術 30</p> <p>この年</p> <p>▷ 秋 滞欧中の安井曾太郎、小川千鶴と共に伊国に見学旅行す。作品「足を洗う女」・「黒き髪の女」・「赤き屋根」など。 日本美術年鑑 昭31</p>
<p>▷ 寺松国太郎、仏国サロン ド フランセーズに入選。 日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>▷ 京都商品陳列所（所長丹羽圭介）、パリのサロンへの出品の便宜を与える。 京都商品陳列所第4回報告</p> <p>▷ 2代浅見安兵衛、絵画を捨てて陶界に入る（4代清水六兵衛に陶法を、神阪雪佳に図案を学ぶ）。 京都工芸大観</p> <p>▷ 神阪雪佳、市より御大礼献上の金蒔絵冠棚ならびに文台硯の箱の図案の製作および監督を任命される（また宮中御能の際、記念の紋章つき謡曲装訂あるいは大礼用列車の食堂などの装飾図案などを調製）。 雪佳遺作集</p> <p>▷ 初代諏訪蘇山、青磁の研究に成功。 京都工芸大観</p> <p>▷ 第2勸業館北館、岡崎公園の第1勸業館と応天門通りをへだてて西へ連なる地に竣工（北は二条通りを隔てて市公会堂と対置、西南の二面は疏水に面する。建坪1,200坪、大4、南館850坪を増築、ルネサンス式に日本趣味を加えた木造平家建、昭9・9台風のため倒壊、昭12・10再建、同建物で以後毎年各種の博覧会、共進会、見本市が開催される）。 京都博覧協会史略</p> <p>この年ごろ</p> <p>▷ 清水五条地区から日吉地区へはじめて移築しはじめる（大正5、泉涌寺一帯は本格的な築窯地区となる）。 京焼百年の歩み</p> <p>▷ 大2～3頃、友禅はようやく活気を呈し油絵・パステル式流行、なおこの頃から流行色は各呉服店で選択、多種多様となってくる。友禅の変遷</p> <p>▷ 宇田萩邸、同郷の先輩西井水花にともなわれ、菊池芳文の門に入る。京都に於ける日本画史</p> <p>▷ 橋本閑雪、京都に移住する。その後はじめて支那漫遊（上海、浙江省、蘇州、北京、北満、朝鮮を経て7月帰国、その後60数回ゆく）。 美術新報 20:7、日本美術年鑑 昭19-21</p> <p>▷ 青山離宮は今回皇太后陛下の御常住御殿となるにつき御座所の御杉戸の画を東京の小堀鞆音、川合玉堂、盆頭峻南とともに京都から今尾景年、菊池芳文、竹内栖鳳、山元春挙に命じられた（「寒月野鴨」・「青梅に雀」今尾景年、「杠若」・「狗児」竹内栖鳳、「春山に雉子」・「寒月に千鳥」菊池芳文、「不老長春」・「懸唾紫藤」山元春挙、「蟲選び」・「花合せ」谷口香嶠）。 美術新報 226、228</p> <p>▷ 各呉服店、図案団体、染織図案家の図案展、意匠展、新柄発表会がひんばんにひらかれる。 京都美術各号</p> <p>▷ 第1回農展審査員に京都から中沢岩太・鶴巻鶴一・武田五一・神阪雪佳ら選ばれる。 美術新報 230、雪佳遺作集</p>

参 考	日 本
<p>(2)第7回文展（京都関係のみ）</p> <p>審査員出品 木島桜谷「駅路の春」、山元春挙「春夏秋冬」、竹内栖鳳「絵になる最初」</p> <p>受賞者 日本画（第1科）3等賞「四時清娘」池田桂仙、褒状「乍雨乍晴」田近竹邨、「積翠塔影」山田介堂。</p> <p>日本画（第2科）2等賞「鉄契蜻蛉」菊池契月、「遅日」橋本閑雪、3等賞「螢」上村松園、「銀杏」山田耕雲、「驟雨」山下竹斎、「放ち飼」小村大雲、「春」星野空外、「桜雲」玉舎春輝、「鶉」山内信一、褒状「柿」田畑秋壽、「炭焼き」八田高容、「秋興」西村五雲、「志摩の波切村」小林霞村、「夕榮」榊原紫峰、「唐もろこし」樺文峰、</p> <p>西洋画3等賞「ポプラ」と夏蜜柑」河合新藏、</p> <p>「櫛」寺松国太郎。 日本芸術院史</p> <p>入選</p> <p>第1部日本画</p> <p>「長閑寂莫」三宅呉暁、「江南春鶯」内海吉堂、「暖き冬」石崎光瑤、「鶴飼」疋田芳沼、「日なが」榊原佳山、「仮睡」岡本蕉雨、「春麗」松井香露、「雁来紅」阿部春峰、「海女」土田麦麿、「沈寢容膝」富田溪仙、「朝顔」三木翠山、「日盛り」福本古葉、「天竜川」井口華秋、「野崎のお光」岩佐古香、「鶉鶉」川村曼舟、「なぎたる浜」広田百豊、「農鐘」川北霞峰、「宇治川上流のししとび」庄田鶴友、「細雨の後」勝賀瀬菱洲、「怒濤」西井敬岳、「葵祭の図」栗林太然 絵画叢誌 317</p>	<p>10・16～22 生活社第1回油絵展、ヴィナス倶楽部に開催、高村光太郎「焼岳」・「秋の山」、岸田劉生「B.L.の肖像」・「二階より」など。</p> <p>10・24～28 富本憲吉試作展、ヴィナス倶楽部に開催（陶器試作、陶器図案及び古陶器スケッチを展観）。</p> <p>10・25～11・15 農商務省主催第1回図案及応用作品展、同省商品陳列館内に開催（出品総数1,700点、鑑査により309点が合格、受賞府県別では人員、点数とも京都がほとんどを占める。御用品および農商務省買上げ品計25点など。京都の受賞者については巻末の付録を参照）。</p> <p>10・一 『エゴ』創刊、(千家元麿、岸田劉生ら、『白樺』の衛星誌～大5・1)。</p> <p>11・5 山下新太郎・斎藤豊作ら、文展洋画部への第2科設置を文部省に建議。</p> <p>11・29 東京美術学校編『法隆寺大鏡』～大8・5・15、60集、大10・7・31～昭4・2・7『南都七大寺大鏡』を続刊、77集。</p> <p>この年</p> <p>▷ 三都（東京・京都・大阪）銅器陳列会、鍔金家香取秀眞・松原如方・岩井正俊の3名主催にて、大島如雲、野上龍起、市岡紫雲、高橋凌雲ら、11名賛成員となり三都名工の手に成りたる鑄銅品の逸品を選集して、京橋尾張町三珂商會に陳列会を開く、出品点数1,200余点。</p>

京	都	府
1・7 小川千鶴帰国、後東京に移住。 関西美術院歴史概要、日出 1・12		7・5～6 後素協会小品展覧会、京都倶楽部に開催。 日出 6・29
1・8 金工 5代龍文堂没(名喜兵衛、享年82)。 京都工芸大観		7・15 陶芸家 3代清風与平没(嘉永4・2・10播磨生、名晃浦、享年64、東山東大谷に葬る。かわって2男が4代与平となる)。 京都美術 32、京都名家墳墓録
1・20 菊池塾研究会(菊池契月「おうな」、吉原華城「新内」ら24点)。 日出 1・22、京都美術 31		8・6 望月玉溪、藤田男爵邸杉戸(16枚)を完成。 日出 8・7
1・一 初代諏訪蘇山、朝鮮李王家より高麗古窯旧跡の調査を囑託され渡朝(10月李王家に青磁鳳凰耳花瓶を献上、11月李王家より高麗古窯再興計画および工場主管を命ぜられる。翌4年その功により銀盃などを賞賜される)。 京都工芸大観		8・7 香嶠自邇会十二月画会作品展、左阿弥に開催(嘯谷、竹崖、柴郊ら15名)。 日出 8・7、8・8
1・一 4代清水六兵衛、隠退、六居と改名、長男栗太郎は5代六兵衛を襲名。 同上		8・9 陶工 井上延年没(享年73)。 松風嘉定
2・1～15 美術新報社主催の新画展覧会嵐山倶楽部に開催(栖鳳「水墨山水」、鉄斎「放開眼界」、香嶠「楠公読未来記」、松年「七賢人」、松園「おまん」、契月「おせん」、桜谷「桜下泛舟」など)。 日出 2・3		8・12 宗達会設立。 京都美術 32
3・4、5 香嶠塾自邇会展覧会、美術俱様部に開催。 日出 2・23、3・5		8・28 陶界功労者 河原徳立没(弘化元12・3江戸小石川生、幼名五之助、次いで五郎、享年71、東京谷中斎場に葬る)。 京都美術 33、河原徳立翁小伝、大日本窯業協会雑誌 267
3・7、8 春挙塾早苗会第15回展覧会、第1勸業館に開催(堀江一紅「茨竹桃」、川端春挙「芭蕉」など)。 日出 3・4、3・5、3・29		8・一 北米サンフランシスコ市のパナマ太平洋万国博に絵画専門学校出品を指定さる。 府史
3・一 竹内栖鳳、青山御所内御座所(皇太后陛下の聖上皇后両陛下御対面所柳桜間)御床脇小襖上下4枚宛に8枚の揮毫を命ぜられ着手、(「嵐山春景」・「群蝶」に決定)。 日出 3・12		8・一 市立美術工芸学校、パナマ太平洋万国博に出品し銀牌を受ける。 実業教育50年史
4・1～5・31 京都博覧協会、はじめて京都美術協会と合同共催にて全国美術工芸品展を岡崎公園、第1、第2勸業館に開催。 京都博覧協会史略		9・7 市内陶磁器業者の有志ら、同業の発展と親睦のため、京都陶磁器青年会を設立、講演会を市立陶磁器試験場に開催。 京都美術 33、日出 9・8
4・26 関西美術会、第13回競技会を関西美術院に開催(鹿子木孟郎、都鳥英喜、寺松国太郎、河合新蔵ら審査)。 日出 4・27		10・15～11・18 第8回文展 ⁹⁾ (審査員竹内栖鳳、山元春挙は出品しなかったが、日本画の2等賞は、6名中京都画家が5名を占めるなど、日本美術院の不参加を京都画壇がおきあった感がある。11・25～12・9 京都陳列会を岡崎勸業館に開催)。 日本芸術院史
4・一 京大文科大学陳列館完成。 京都大学70年史		10・16～18 小川千鶴個人展覧会、府立図書館に開催(渡欧記念の水彩画および絹本画など)。 日出 10・17
4・一 仁和寺宸殿、右京区御室大内町に完成(明42・11 着工、設計者は技師亀岡末吉、木造平屋建、桧皮葺、和風障壁画を原在泉が描く)。 京都の明治文化財		10・16～31 第13回関西美術会展、第1勸業館に開催(出品総数300余点、寺松国太郎「玄武洞」、河合新蔵「夕嵐」、都鳥英喜「粟津」、新井謹也「村の入口」、沢部清五郎「福島」、伊藤快彦「湾口」、間部時雄「比叡の暮」その他、鹿子木孟郎、黒田重太郎、太田喜二郎、加藤源之助ら、後期印象派の作品あらわれる)。 日出 10・17、18、22、24、京都美術 34
5・3 鈴木松年の画仙堂の上棟式。 日出 4・25		10・18 故河原徳立追悼会を南禅寺金地院に挙(京都博覧協会、京都美術協会および遊園園主催)。 京都美術 34
5・31～6・1 沢部清五郎、滞欧作品展を府立図書館に開催。 京都美術 32		10・24、25 佳都美会小品展を南禅寺金地院に開催。 同上
6・一 村山槐多、中学卒業後上京(山本鼎の紹介で小杉未醒の離れに寄寓)。 異色の近代画家たち展目録		

参	考	目	本
(1)第8回文展 審査委員(京都関係のみ) (日)菊池芳文、(日)竹内栖鳳、(日)山元春挙 審査員出品 菊池芳文「小雨ふる吉野」 受賞者 日本画 2等賞 菊池契月「ゆうべ」、上村松園「舞したく」、川村曼舟「比叡山三題」、都路華香「閑雲野鶴」、橋本閑雪「南国」 3等賞 平井操仙「遼河の夏」、池田桂仙「山高水遠」、西山翠嶂「採桑」、小村大雲「愈ひ」、川北霞峰「溪間の秋」 褒状 田近竹郁「春雲秋靄」、庄田鶴友「暮れゆく秋」、石崎光瑠「寛」、土田婁慶「散華」、松村梅叟「画室の花」、山田耕雲「鴻」、林文塘「樵」、玉舎春輝「青東風」、水田竹圃「雲林清深」、山下竹斎「山路の秋」 西洋画 2等賞 太田喜二郎「帰り路」 入選 第1部 日本画 「立話し」疋田芳沼、「日盛」人見少華、「春麗」水野清亭、「つゆ」長瀬翠塘、「奔流」山元春汀、「夏の真昼」岡藤園、「蚕飼時」渡辺公観、「すももの里」森月城、「涼意」木島桜谷、「初秋」亭島南洋、「耕作」柴田晩葉、「秋声」秦金石、「清溪漁隠」山田介堂、「湖畔の夏」高畑文石、「花合歓」勝賀瀬菱州、「昼さびし」浦島春濤、「画僧」猪飼嘯谷、「浮碧楼台の秋」千種掃雲、「せんたくもの」大村広陽、「冠鶴」山口松斎、「花の御室」有山白崖、「青柿の檐」三原翠山、「漢朝」高山春凌、「山中の湯」広田百豊、「たそがれ」原田西湖、「田植」竹内鳴鳳、「こだました後」小早川秋声、「水郷」栗林太然、「西湖烟柳」服部五老、「愈ふ間」山内臥雲、「梅雨の頃」岡文濤、「うたたね」西桜州、「絶峰催雨」徳田隣齋、「竹園のねわり」伊藤琴川 第2部 西洋画 「雁来紅」吉田崑、「若き女」寺松国太郎、「道頓堀」河合新蔵、「入海」山脇信徳 第3部 彫刻 「公子立志(木彫)」石本暁海。 美術新報 14:1	3・20～7・20 東京大正博覧会、上野公園に開催(百穂「鴨」、上村松園「深雪」、太田喜二郎「赤い日傘」、中村彝「少女」)。 4・2 東京美術学校創立第25年記念祝典が挙行される。 6・20～24 佳都美会展覧会、大阪飯田呉服店に開催。 8・10 勅令158号をもって美術審査委員官制中「審査委員会ノ職務及組織並ニ審査委員長ノ任期3年、審査委員ノ任期ヲ1年トス」と改正。 8・11 文部省告示124号をもって美術展覧会規程中第1部の科を廃止するにつき関係条項を改正する。 8・23 政府、ドイツに宣戦布告(第一次世界大戦に参加)。 9・2 日本美術院再興開院式を挙(同人は今村紫紅、横山大観、安田靉彦、小林未醒、下村観山、木村武山ら、洋画部も設ける)。 10・1 第2回農展(出品は図案351点、応用作品533点、合計884点、うち合格は197点、京都側は非常の好成績をおさめる)。 10・1～31 二科会第1回展、上野竹之台に開催〔文展第2部(洋画)2科制設置の建議を拒否され、石井柏亭、梅原龍三郎、津田青楓、山下新太郎、小杉未醒、坂本繁二郎ら結成、有島生馬「鬼」、湯浅一郎「官妓」、齋藤豊作「落葉する野辺」など〕。 10・15～11・15 日本美術院再興記念展覧会、三越に開催(大観「游刃有余地」、観山「白狐」、紫紅「熱国の巻」、靉彦「御産の祈り」、古径「異端」、青邨「竹取」・「湯治場」など、10・24古径、青邨、大智勝観、平橋田中、吉田白嶺、内藤伸、佐藤朝山を同人に推挙、洋画部は1点も採用されない)。 10・15～11・18 第8回文展、大正博覧会美術館跡に開催(広業「高山清秋」、清方「墨田川舟遊」、百穂「七面鳥」、閑雪「南国」など)。 11・一 日本美術院展覧会を初めて大阪で開く但し以後は京都開催にきまる。 12・一 紫紅、赤曜会をおこす。	この年 ▷ 満谷国四郎帰国、正宗得三郎・森田恒友渡欧。 ▷ 木沢孚著『現代日本美術家全録』刊行、この種の刊行相つぐ。 ▷ 『白樺』には「回想のゼザンス」(有島訳)掲載。	

京 都 府
<p>11・25 泰テルヲ、例により文展会場前に作品展を開催。 日出 11・24</p> <p>11・— 安井曾太郎、欧州より帰国（この年滞仏中、リュ・ド・バルイーハからリュ・ド・ババンのアトリエに転居、8月第一次世界大戦勃発と病気のため留学中の主要作品45点を携えてロンドンに逃れ、初秋ロンドンから帰国、作品「孔雀と女」・「下宿の人々」など。12・7 歓迎会を左阿弥に開催）。 日本美術年鑑 昭31、日出 12・8</p> <p>12・27 関西美術院競技会を開催。 日出 12・29</p> <p>12・— 三井銀行京都支店下京区烏丸通り四条角に完成（大1・12 着工、設計者鈴木禎次、鉄筋コンクリートおよび煉瓦造、近世フレンチ・ルネサンス式、鹿子木孟郎は同店天井画を製作）。 京都の明治文化財</p> <p>12・— 袋師 9代土田友湖没（名安治郎、享年22）。 淡交テキスト茶道具編</p> <p>この年</p> <p>▷ 洋画家 印藤眞樞没（文久1生、享年54）。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 榊原紫峰、第8回文展に「秋草」を出品したが落選、これを大観の推薦により小野竹橋の「黍熟るる頃」と共に第2回院展に出品。 榊原紫峰展</p> <p>▷ 竹内栖鳳、御大典御用「主斎田風俗絵軟障」を揮毫。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>▷ 雑誌『京都美術』第31号に論説「セセッション式」が掲載される（編者、東京高等工業学校教授前田松韻）。 同誌</p> <p>▷ 人形商 5代越後屋庄三郎没（号芦田）。 京洛人形づくし</p> <p>▷ 上村松園、大正博覧会に「娘深雪」出品、2等銀賞をうける。 日本美術年鑑 昭22-26</p> <p>▷ 富田溪仙、横山大観の推挙により日本美術院に入り再興日本美術院第1回展へ「鼎峠行人」を出品、院友に推される。 富田溪仙遺作展目録</p> <p>▷ 富田溪仙、大和達摩寺の襖絵を描く。同上</p> <p>▷ 太田喜二郎、東京大正博に「赤い日傘」を出品。 大正博覧会美術館出品図録</p> <p>▷ 沢田宗山、東京大正博に「うららか」・「蒔絵棚図案」を出品、名誉大賞牌を受ける。 京都工芸大観</p> <p>▷ 平安神宮神苑第2期竣工（設計者は造園師小川治兵衛、廻遊式池庭）。 京都の明治文化財</p> <p>▷ 西村五雲、夏より病床にふす（大7に及ぶ）。 五雲</p> <p>▷ 梅原良三郎、龍三郎と改名。 梅原龍三郎画集</p>

参 考	日 本
	<p>▷ 『現代の洋画』、特別号『ロダン芸術』を刊行。</p>

京	都	府
<p>1・5 陶界功労者 藤江永孝没(慶応元 3・10金沢生、享年51、幼名他吉郎、南禅寺金地院に葬る)。 藤江永孝伝</p> <p>1・一 沢田宗山、米国サンフランシスコ万国博に桜、橘の図案を出品、賞牌を受ける。また京都府出品協会代表として渡米、同博の陳列と米国における工芸調査を行う(5月帰国)。 京都工芸大観</p> <p>2・1~15 新作画展覧会、嵐山倶楽部に開催(竹内栖鳳「伊香保」、山元春挙「蓬萊山」、鈴木松年「嵐山の奥」・「陶弘景」、菊池契月「夕月」、谷口香嶺「那須与一」・「大和物語」、富岡鉄斎「哲山居」、今尾景年、木島桜谷、土田麦麿、池田桂仙ら出品)。 日出 2・3</p> <p>2・6 楊守敬遺墨展、府立図書館に開催。 日出 2・6</p> <p>2・6、7 後素協会小品展、八阪倶楽部に開催(「柳」今尾景年、「桜」西村秀岳、「柳に雀」芝千秋、「柿実」渡辺公観など)。 日出 2・6、2・7</p> <p>3・5~14 白樺社第7回美術展、府立図書館に開催(マンテナ、レオナルド=ダ=ヴィンチ、ミケランジェロ、レンブラント、ゴヤの素描、ブレーク、ルドンの彩画、版画を数十枚展示)。 日出 3・5、京都美術 36</p> <p>3・19 陶芸家 初代三浦竹泉没(嘉永6京都生、享年62、名駒次郎、裏寺町光明寺に葬る)。 京都名家墳墓録、日出 3・23、京都工芸大観</p> <p>3・21、22 早苗会展、第1勸業館に開催(庄田鶴友「暖風・長閑・爛熳」(3幅対)、山下竹斎「残月」、西村敬岳「残雪など」)。 日出 3・22</p> <p>3・一 植田豊橋、市立陶磁器試験場長に就任。 松風嘉定</p> <p>4・1~5・31 京都博覧協会および京都美術協会共催、戦捷記念博を岡崎公園第1、第2勸業館に開催(審査員 第7部(美術工芸品)部長 武田五一、第一類(染物刺繍)主任 鶴巻鶴一ほか5人、第二類(漆器)主任 金子篤寿ほか4人、第三類(金属器)主任 並河靖之ほか2人、第四類(陶磁器)主任 植田豊橋ほか4人、第五類(各種工芸品)主任 丹羽圭介ほか4人)。 日出 4・9、京都博覧協会史略</p> <p>4・16~19 河合新蔵、無涯画会油絵作品展を大丸に開催。 日出 4・16、京都美術 36</p> <p>4・20 木島桜谷、山田耕雲、猪飼囃谷、加藤英舟、阿部春峰らの大阪曾根崎演舞場貴賓室の絵画完成。 日出 4・22</p> <p>4・一 横山大観、日本美術院の学術顧問に竹内栖鳳を懇請したが不成功に終る。 日出 4・18</p>	<p>4・一 鹿子木孟郎、関西美術院拡張のため、独力で日本画会設立を発表(これに端を発し同院会頭中沢岩太と対立)。 日出 4・22、23</p> <p>4・一 園頼三、同志社大学教授となり、美学美術史を教授。 同志社美学 7</p> <p>5・11 京都契美会、宮内省へ上納する手箱3個を会員に内覧(迎田秋悦、戸島光字ら制作)。 日出 5・12</p> <p>5・23 円山応挙建碑式を曾我部村字穴太で挙行。 日出 5・24</p> <p>5・29 鹿子木孟郎、伊藤快彦、寺松国太郎、都鳥英喜、沢部清五郎ら関西美術院問題討議のため同院に会合(関西美術院の存続、教師の更迭、将来の経営方法について討議。鹿子木孟郎、同院長碎職を言明)。 日出 5・31</p> <p>5・29 市立絵専兼市立美術工芸学校校長、松本亦太郎辞任(東京大学に転任)。 双葉</p> <p>6・2 光琳200年忌、妙願寺で開催(抹茶席は全て佳都美会員の新製品を使用、茶碗は河村蜻山、水指は清水六兵衛と役割を分担、なお2~4日、光琳派作品展を府立図書館に開催)。 日出 6・3</p> <p>6・16 京都図画教育会を柳池校に開催。 日出 6・17</p> <p>6・一 鹿子木孟郎、関西美術院院長を辞職、(当分は同院には院長は置かず。後任として安井曾太郎が教鞭をとる。なお院則も大改正される)。 日出 7・9</p> <p>7・3、4 後素協会小品画展、八阪倶楽部に開催(今尾景年「雨後月」、西村秀岳「螢」、三宅呉暁「寒山拾得」、上田万秋「童子」、猪飼囃谷「鷹匠」など)。 日出 7・4</p> <p>7・7 サンフランシスコ万国博出品審査受賞が公表される(美術品大賞川島甚兵衛「唐織」など、美術品名誉賞並河靖之「七宝」、平岡利兵衛「磁器」、梶本清三郎「刺繍屏風」など)。 日出 7・10</p> <p>7・7、11 光芒主催、第1回絵画工芸品展、大丸呉服店に開催(出品者:河合卯之助・村上華岳・野長瀬晩花・松宮芳年・藤井達吉・森谷利喜雄、この趣旨「この展覧会が雑誌『光芒』を代表したものであるかどうかそれが第一回のものでありますだけに或は誤解される人があるかも知れませんが、それについては『光芒』同人中の誰もが問題にはして居りません。唯そこには各個人個人の作品があるばかりです。そして『光芒』同人は各個人個人の利作に対する誠実を信じてここに展覧会を催します」)。 日出 7・8</p>	

参	考	日	本
(1)第9回文展 審査委員(京都関係のみ) (日)山元春挙、(日)菊池芳文、(日)竹内栖鳳 審査員出品 菊池芳文「鶴鶴」 受賞者 西洋画 2等賞 「薪」太田喜二郎 3等賞 「鏡の前」森脇忠 日本画 2等賞 菊池契月「浦島」、川村曼舟「連峰映雪」、上村松園「花がたみ」、平井棹仙「夏京」、橋本閑雪「狐」 3等賞 土田麦麿「大原女」、小村大雲「東へ」、川北霞峰「立山」、西山翠嶂「農夫」、伊藤小坡「製作の前」、池田桂仙「春把生芽図」・「雪後寒林図」、上田万秋「光風霽月」・「盛夏」、水田竹圃「大華山実景」 褒状 大村広陽「初夏」、松村梅叟「祭の日」、井口華秋「信楽の郷」、山田耕雲「葡萄」、徳田隣斎「稲荷山の春秋」、山元春汀「華巖」、玉舎春輝「豊楽」、庄田鶴友「閑汀図」 日本芸術院史 入選 第1部日本画 「家島の夏(真昼、夕映)」森月城、「祭の日」松村梅叟、「森林明月」服部五老、「松林山水」秦金石、「露」板倉星光、「雨のあと」紺谷光俊、「踊妓」小西長広、「葉ざくら」速水松琴、「ねがひ」堀井香坡、「秋の雨」山口松斎、「幕切れの刹那」小早川秋声、「桃の園」榊原苔山、「雨後の奔流」川辺華堂、「涼風」大亦墨亭、「林和靖」川畑春翠、「みはれるまなこ」高谷仙外、「拾君」猪飼囃谷、「時雨ゆく」伊藤琴川、「夕茜」渡辺公観、「朝」小林春樵、「壬生狂言の楽屋」案本一洋、「昼すぎ」有井祥雲、「立山」川北霞峰、「狐」・「嵯峨三題」小林雨郊、「落雷」一瀬孤螢、「うまや」木島桜谷、「華巖」山元春汀、「稲荷山の春秋」徳田隣斎、「日午」橋本虹影、「江畔」今井松窓、「蜻壺」山本天章、「樹間の流」高山春凌、「秋近し」田畑秋濤、「陶器窯図」朝見香城、「琉球つばめ」岡田孤村、「おかげ詣の巻」川口呉舟、「文叢を焼いて」小早川秋声、「あてに孤鹿」岡本方水、「文禄の威風」岩田秀耕、「夏のまひる」竹内鳴鳳、「雪の日」佐野一星、「寧楽の春」疋田芳沼、「飛来	<p>2・20~12・4 米国パナマ太平洋万国博、サンフランシスコに開催。</p> <p>2・一 赤曜会第1回展、目黒夕日ヶ丘に開催(今村紫紅、速水御舟ら大3・12結成)。</p> <p>2・一 白樺社主催第7回展、ゴヤ、レンブラントなどの複製画を展観。</p> <p>2・一 斎藤与里小品展。</p> <p>3・一 村山槐多、第1回日本美術院習作展に「六本手ある女の踊り」ほか数点の油絵を出品する。</p> <p>4・一 大観ら東海道行脚を試み「五十三次絵巻」をつくる。</p> <p>4・一 法書会春季大会東京美術学校に開く。</p> <p>5・一 日本書道会第4回展覧会、東京三越に開催。</p> <p>5・一 健筆会第6回展覧会、上野日本美術協会に開催。</p> <p>5・一 岸田劉生個展。</p> <p>6・1~3 光琳200年忌記念展、三越に開催(「燕子花」・「楨に紅葉図屏風」・「紅白梅に水」など多数出陳)。</p> <p>6・2 日本画家 荒木寛敏没(天保2生、享年85)。</p> <p>6・25 大村西崖、『支那美術史彫塑編』出版。</p> <p>6・一 栖鳳、小蘋、御即位大饗用屏風を描く。</p> <p>6・一 木村荘八個展。</p> <p>9・4 洋画家 五姓田義松没(安政2生、享年61)。</p> <p>10・1~ 第3回図案及び応用作品展、農商務省主催にて同省商品陳列館に開催、昨年より50%増の出品、1,068点のうち京都は207点、審査委員長 上山満之進、審査委員 中沢岩太、高松豊吉、正木直彦、松岡寿、塚本靖、吉武栄之進、高村光雲、三山喜三郎、武田五一、鶴巻鶴一、萩原清彦、岡田三郎助、島田佳矣、海野美盛、植田豊橋、神阪雪佳、中條精一郎ら。</p> <p>10・6 金工家 海野勝珉没(弘化1生、享年72)。</p> <p>10・11~31 第2回院展、上野精養軒に開催(観山「弱法師」、古径「阿弥陀堂」、溪山「宇治川の巻」、寛方「乳糜供養」など、10・27富田溪山・中村岳陵・荒井寛方、倉田白羊・長谷川昇を同人に推挙)。</p> <p>10・13~26 第2回二科展、三越にて開催(田辺至、柳敬助は退会、安井曾太郎・森田恒友・正宗得三郎が会員となる。山下新太郎「供物」・「端午」、坂本繁二郎「牛」など、安井曾太郎の滞欧作「孔雀と女」・「足を洗う女」など特陳)。</p>		

京	都	府
7・16 吉田忠三郎の注文になる横山大観「寒山拾得」、谷口香嶠「橋弁慶」が完成。 日出 7・16		景年に錦秋障の揮毫の下命がある。 絵画叢誌 337
7・24～26 密栗会同人絵画習作展覧会大丸呉服店に開催（星野空外・不動立山・入江波光・三宅呉暁、甲斐荘楠音・榊原始更・玉村方久斗ら美工絵専の出身者によって組織）。 日出 5・5、7・15	12・4 佐久間象山遺墨展京都大学学生集会所に開催。 美術新報 大5・1・1	12・20 鹿子木孟郎、松井駐仏大使に伴われて三度仏国に出発（ローランス画伯に師事、突然のことで、同家塾門下生を太田喜二郎に托す）。 鹿子木孟郎小伝、日出 12・22
8・一 京都市が御大典奉祝に献上する画帖の筆者が決定（竹内栖鳳ら36名）。 日出 8・22、8・23、絵画叢誌 337	この年 ▷ 富岡鉄斎、伏見宮家の嘱により「帝舜耕歴陶河浜図」を描く。 鉄斎	
9・21 沢部清五郎、日本画展を六角会館に開催（滞欧中のスケッチ）。 京都美術 37、日出 9・22	▷ 船川未乾、第1回個展を京都大学学生集会所に開催。 日本美術年鑑 昭32	
10・1～12・19 大典記念京都博覧会、 ⁽²⁾ 岡崎公園に開催（市主催、美術工芸品は美術館に、古美術品は帝室京都博物館に展示）。 日出 10・1～12・20	▷ 牧野克次帰国、東京へ移住。 京都洋画の黎明期	
10・5 西陣織物館、今出川通大宮東入ル元伊佐町に開館式および竣工式を挙行。 西陣織物館記	▷ 深田康算、キュービズム派の作品を映写しながら「欧州近代絵画について」を京都大学祝日講演に講話する。 日出 3・3	
10・14～11・14 第9回文展 ⁽¹⁾ （竹内栖鳳、山元春挙は不出品、土田麦麿「大原女」が好評、11・21～12・10、京都陳列会を市立絵画専門学校および美術工芸学校に開催）。 日本芸術院史	▷ 市立陶磁器試験場付属講習所、陶画および轆轤の両正科のほかに模型科を増設。 藤江永孝伝	
10・23 佳都美会小品展、南禅寺金地院に開催（石本暁海「仲麿」、神阪雪佳「一閑張隅棚」、河村靖山「群鶴花瓶」、迎田秋悦、伊東陶山、戸嶋光宇）。 京都美術 37、日出 10・24	▷ 河村靖山、栗田より深草に移住。 京都工芸大観	
10・一 安井曾太郎、第2回二科展の別室で滞欧作品44点を発表、二科会会員に推挙される。（「孔雀と女」など、以後21回展まで二科展に出品）。 日本美術年鑑 昭31	▷ 八木一舂、市立陶磁器試験場を卒業、高橋清山および高橋道八につき修業。 同上	
11・9 日本画家 谷口香嶠没（享年52、元治元8大阪府和泉生、深草宝塔寺に葬る）。 京都名家墳墓録	▷ 2代秦蔵六、大秦広隆寺宝物館銅扉を鋳造。 日本鑄工史	
11・20～12・5 日本美術院第2回展京都陳列会、二条通柳馬場青年会館に開催（京都に関西協賛会が組織されたため、はじめて開催、文展以上の入場者があった。富田溪仙「宇治川の巻」出品10・27 院同人に推挙される）。 美術新報 大5・11、日本美術院史	▷ 米沢蘇峰、石川県金沢第2中学第4年にて中途退学、家族とともに京都に移住。 京都工芸大観	
11・一～23 二科展、はじめて第2回展を、京都の四条通繩手東の都名産陳列所に開催（9日より夜間も開場、油絵、水彩、テンペラ素描、木版など63点、他に安井曾太郎の滞欧作40余点を展示、以後毎年東京展終了後、京都でも開く）。 日出 11・2、美術新報 大5・1	▷ 友禅、新花鳥を題材とし、写生を略して新しい隈取が用いられ、茶・ローズ色が流行（ローズ色は大12～13ごろまで、濃淡の変遷をみせ流行持続する）。 友禅の変遷	
11・一 竹内栖鳳に御大典の主基御屏風、今尾	▷ 第3回農展、京都側低調、東京側優勢。 日出 10・4	

参	考	日	本
峰」・「行濼」林文塘、「スリチビ」岡文濤、「林寺の朝」広田百豊、「繫纜」高橋秋華、「花林檎」東原方麿、「背戸の鳥」星野空外、「春耕図」村上華岳、「花の渡」三木翠山、「深き溪」西井敬岳、「初夏の朝」水野清亭、「寒汀図」庄田鶴友、「はぐくむ鶴」阿部春峰、「白梅」榊原紫峰、「神苑初夏」浦島春濤、「森の藤」石崎光瑠、「風」広江霞舟、「ユウカリ」峰内光雪、「風雪」山下竹齋、「保津の川べり」栗林太然、「密柑」高倉観崖、「葉陰に」永田麦翠、「豊楽」玉舎春輝、「西日」土肥南浦。 帝国絵画宝典		10・14～11・14 第9回文展、上野竹之台に開催（寺崎広業「夜聴歌者」、藤島武二「匂い」、長原孝太郎「晩春」、北村西望「怒濤」、堀進二「老婆の肖像」など）。	
(2)大典記念京都博覧会受賞者（美術館のみ） 銀賞 「料紙文庫硯箱」岡本専助、「秘色磁鳳凰大花瓶」清風与平、「菱形饗饗花瓶」伊東陶山、「青磁鳳凰花瓶」平岡利兵衛、「家の側面」森田芦舟、「秋風の漁夫」宮本薫翠 銅賞 （合金鍍起製彫刻香炉）大久保猷興、（鉄製海老置物）高瀬虎吉、（髹漆蠟色平卓）大橋莊兵衛、（蒔絵手箱）田中弥兵衛、（漆器二段卓）三木表悦、（髹漆手箱）山下鉄三郎、（青磁花瓶）宮永東山、（秘色磁花瓶）吉岡吉兵衛、（七宝盛鉢）稲葉七穂、（游禽透紋鉢）三浦竹泉、（六方式手附插花籠）森田新太郎、（倭鷄具象嵌樹立）宮崎平七、（白砂の丘）内貴杜参、（ポプラ雑立）奥田紫明、（愛）山本増造、（徴古帳）山田直三郎、（画帳）小林忠次郎、（白き倉）塚本素川、（肖像）成井頼佐、（鉢夫）関観水、（額皿図案）福田翠光、（ねがひ）福田岬村、（室内裝飾図案）千熊宇平 日出 11・28	10・17～31 草土社第1回展、読売新聞社に開催（岸田劉生・中川一政・木村荘八ら）。		
		10・一 雑誌『中央美術』創刊（石井柏亭・結城素明・田口掬汀編集、昭4・6、昭8～同12・12＝203冊）。	
		10・一 村山槐多、日本美術院展に「カンナと少女」出品。	
		11・28 版画家 小林清親没（弘化4生、享年69）。	
		12・20～31 三都銅器美術展、銀座尾張町三珂商会に開催（岡崎雪声・大島如雲を顧問、市岡紫雲・土師如春・沼田一雅・山下如雲・木原豊舟等の作品数100点を陳列）。	
		この年 ▷ 和田三造帰国、久米桂一郎渡米。	

京	都	府
<p>1・15～4・30 京都工芸品展、岡崎公園第2勸業館および商品陳列所に開催（市主催）。 京都工芸展覧会報告</p> <p>2・6、7 後素協会小品画展、八坂倶楽部に開催。 京都美術 39</p> <p>2・21 鹿子木孟郎、仏国マルセーユに到着、ルネ＝メナール画伯に接近し、風景画に関する造詣を伺い得、さらに絵画のコンポジションを学習する。 鹿子木孟郎小伝</p> <p>2・22 日本画家 原在泉没（嘉永2・4・23京都生、号松濤、享年68、寺町三条天性寺に葬る）。 京都名家墳墓録、日出 2・23</p> <p>3・26 3代松風嘉定、府から緑綬褒賞を授与される。 松風嘉定</p> <p>3・31 版画家 石田有年没（享年72、西寺町専念寺に葬る）。 日本銅版画志、日出 4・5</p> <p>3・一 京大文学部教授藤代禎輔、市立絵画専門学校長を兼ねる。 双葉</p> <p>4・28 市立陶磁器試験場、創立20周年記念式を挙行（創立以来の代表的作品を4期にわけて、200余点を展示）。 藤江永孝伝、日出 4・28</p> <p>4・30 関西美術会第15回競技会、関西美術院に開催（出品40余点、伊藤快彦・都鳥英喜・寺松国太郎が審査）。 日出 5・1</p> <p>5・13、14 早苗会第17回展、第2勸業館に開催（出品数200余点、岡文濤「土佐の浜辺」、川村曼舟「舞子浜」、案本一洋「送り火」など）。 日出 5・14</p> <p>5・一 安井曾太郎、熱海・伊豆に静養、後東京豊島区目白町2の1673に居住。 日本美術年鑑 昭31</p> <p>6・9～11 第5回遊陶園・京漆園・道楽園三園製品展、東京農商務省陳列館に開催。 中央美術 10</p> <p>7・5、6 後素協会小品画展、八坂倶楽部に開催。 京都美術 40</p> <p>7・9 山元塾夏雲会、八坂倶楽部に開催（山元春汀「雲の峰」・「夕立」（双幅）、素江「夕立」、雅堂「滝」、蘇峰「滝」など出品）。 日出 7・10、京都美術 40</p> <p>7・14～20 秦テラ絵画展、祇園石段下三染屋に開催（前後して東京・神戸でも開く、このころ同所で竹久夢二・野長瀬晚花の作品展も開催）。 中央美術 11、朝日 7・20</p> <p>9・一 旧浅井忠門下の洋画家の有志、同人会を設立（会員加藤源之助・田中善之助・黒田重太郎・国松桂溪・新井謹也・沢部清五郎、10・1～2第1回同人会展、京都商業会議所に開催。大8春の第3回まで）。 京都洋画の黎明期、日出 10・2</p>	<p>10・1 西陣織物組合、染織試験場を市に寄附、この日から京都市染織試験場として上京区烏丸通今出川上ル相国寺門前町に開場。 市染織試験場要覧</p> <p>10・5 図案研精会が設立され、染織および半襟図案展を六角会館に開催（同会は友禪図案家岩佐有彩らによって設立される。大13・2の解散まで定期的に展覧会を開催）。 中央美術 14、近代友禪史</p> <p>10・10 富田誠、市立美術工芸学校教諭心得を退職する。 双葉</p> <p>10・14～11・20 第10回文展⁽¹⁾（土田麦麿「三人の舞妓」は新しい日本画として注目されたが、選外となる。また今回の褒賞制度の改正により、永久無鑑査としての資格を得る推薦には、京都から菊池契月・上村松園・太田喜二郎があげられる。11・29～12・10京都陳列会を岡崎勸業館に開催）。 日本芸術院史</p> <p>10・15～11・5 第14回関西美術会展、第2勸業館に開催（出品数は洋画約300点、写真約40点彫刻2点、陶磁器5点、太田喜二郎「春・夏・秋・冬」の4点をはじめ、寺松国太郎・小川千甕・河合新蔵・国松桂溪・国枝金三・沢部清五郎ら、大阪から赤松鱗作らが出品）。日出 10・16-20、23</p> <p>10・21、22 第13回佳都美会展、南禅寺金地院に開催（伊東陶山「花瓶」・「香炉水指」、河村蜻山「花瓶網代」・「花瓶窯変」、宮永東山「青磁花瓶」、岩村貞蔵「黄春慶桐棚」、その他、戸島光孚・神阪雪佳ら）。 日出 10・22</p> <p>10・一 白沙村荘、存古楼・持仏堂、左京区浄土寺石橋町に着工（設計者橋本関雪、存古楼木造棧瓦葺、持仏堂単層宝形造り桧皮葺、和風）。白沙村荘庭園、起工（設計者橋本関雪、回遊式池庭、茶庭）。 京都の明治文化財</p> <p>10・一 第3回院展京都陳列会第1勸業館に開催（富田溪仙「沖繩三題」など出品）。 日本美術院史</p> <p>11・5 篆刻家 円山大迂没（享年79、東山一心院に葬る）。 京都名家墳墓録</p> <p>11・6 黒田重太郎、渡欧のため神戸出航（パリ到着、大7・1末、同じ船で石崎光瑠はインドへ、井口華秋は南支那に出発）。 中央美術 15、京都洋画の黎明期</p> <p>11・14 京都高等工芸学校、朝集館竣工式を挙行。 実業教育50年史、日出 11・16</p> <p>11・18～12・5 第3回二科展京都陳列会、内貴清兵衛発起の二科後援会主催で府立図書館に開催（東京展より21点少ない108点を展示、安井曾太郎・湯浅一郎・津田青楓・小川千甕らの作品を陳列）。 美術 2、日出 11・17～24</p>	

参	考	日	本
(1)第10回文展 審査委員（京都関係のみ） （日）山元春挙、（日）菊池芳文、（日）竹内栖鳳 審査員出品 山元春挙「山二題」 推 薦 上村松園、菊池契月 特選受賞者 日本画 橋本関雪「寒山拾得」、西山翠嶂「未筭の女」、村上華岳「阿弥陀」、都路華香「埴輪」、山下竹斎「桃の里」、川村曼舟「竹生島」、水田竹圃「早春」、小村大雲「華坊」、川北霞峰「海辺八題」、小野竹喬「島二作」 日本芸術院史	入選 第1部 日本画 「花畑」山内臥雲、「瀟峽の雨」庄田鶴友、「大羽打図」加藤英舟、「つづきもの」伊藤小坡、「山間の村」今井松窓、「夏の昼」宮田玉沼、「秋圃」林文塘、「雲山高逸」西井敬岳、「朝」中野春播、「薫園」東原方僊、「志摩の五月」渡辺公観、「八月の頃」紫田晚葉、「はなれ国の初夏」北上聖牛、「伝燭」板倉星光、「六昆征伐」猪飼嘯谷、「好竹」疋田芳沼、「夾竹桃」有井祥雲、「住吉」田畑秋濤、「送り火」案本一洋、「芋畑」島村舜年、「山村二題」石崎光瑠、「収穫」橋本青楊、「牡丹」沢白鷗、「藤の花」松井香瑠、「港頭の夕」木島桜谷、「漁夫の家」栗林太然、「日午」山口華楊、「都三十景」平井椋山、「竹」山田耕雲、「月蝕の宵」上村松園、「琵琶湖」・「天地の境」川畑春翠、「白孔雀」笠原清見、「阿蘇のまきば」高山春凌、「礦山の一日」玉舎春輝、「平明」横田笙州、「卯月八日」三木翠山、「泉殿」長瀬翠塘、「登山の巻」森月城、「山間の村」花井抱甕、「くるる秋」阿部春峰、「かかる所の秋」上田万秋、「清き水」長嶺折堂、「緩き歩み」広田百豊、「春の遊び」高倉観崖、「花野」菊池契月、「日ざかり」水野清亭、「煉瓦竈」中井汲泉、「莞渚群鶴」大亦墨亭、「曇り日」近藤乾年、「天明焼け」井口華秋、「三人の舞妓」土田麦麿。 第2部 西洋画 「自画像」服部喜三、「山家」・「桑つみ」・「夏の朝」太田喜二郎。 第3部 彫刻 なし	1・7 洋画家 小山正太郎没（安政4生、享年60）。 2・28 日本画家 今村紫紅没（明13生、享年37、4月追悼展を日本橋倶楽部に開く）。 4・1～10 第2回草土社展、銀座玉木屋に開催（岸田劉生「切通しの写生」など）。 5・20 陶芸家 宮川香山没（天保13京都生、享年75）。 5・一 健筆会第7回展覧会。 5・一 金鈴社結成（吉川靈華・籥木清方・松岡映丘・結城素明・平福百穂・田口掬汀ら、大11・6、大6・2第1回展）。 6・10 タゴール来日を機会に日本美術院で講話会とインド画展（6・11～12）を開く。 6・一 選書奨励会、上野美術協会に開く。 7・9 文学者 上田敏没（明7生、享年43）。 9・10～29 第3回院展、上野竹之台に開催（大観「作右衛門の家」、観山「春雨」、靱彦「項羽」、青邨「京名所八題」、川端竜子「靈泉由来」、会期中山村耕花・筆谷等観・長野草風・橋本静水・森田恒友・藤井浩祐・石井鶴三を同人に推挙。 9・23 彫刻家 竹内久一没（安政4生、享年60）。 10・1 第4回農展開催（土品数減じ東京420点に対し、京都252点、沈滞気味）。 10・12～26 第3回二科展、三越に開催（石井柏亭「金沢の犀川」、安井曾太郎「グリア」、正宗得三郎の滞欧作「リモージュの朝など」36点を陳列、熊谷守一を会員に推挙）。 10・14～11・20 第10回文展、竹之台に開催（玉堂「行く春」、麦麿「三人の舞妓」、黒田「茶休」、岡田三郎助「よね桃の林」、中村彝「田中館博士の肖像」など）。 10・21 フランス画家 ルイス＝ジョセフ＝ラファエル＝コラン没。 11・一 文展、褒賞制を止めて特選推薦制となる。 12・9 文学者 夏目漱石没（慶応3東京生、享年50）。 この年 ▷ 青楓図案社、渋江氏の経営により津田青楓試作の書簡箋、壁掛、更紗の如き小家具、文房具を発売す。	美術新報 16:1

京 都 府
<p>11・24 都路華香、市立美術工芸学校教諭となる。 華香墨蹟</p> <p>11・一 京都帝国大学文科の美学美術史専攻の植田寿蔵・中井宗太郎ら、卒業生らと共に美学美術史会を設立(毎月1回例会を開き、会員の研究発表を行なう)。 日出 11・8</p> <p>12・1～5 徳永鶴泉・野長瀬晩花作品展、四条倶楽部に開催。 京都美術 41</p> <p>この年</p> <p>▷ 小合友之助、都路華香につき日本画を学ぶ一方、西陣織物館などで古代裂の模様や図案の研究を行なう。 日本美術年鑑 昭22</p> <p>▷ 上村松園、文展会場皇太后行啓のとき、御前揮毫を命ぜられ「古代舞姫」を制作。 日本美術年鑑 昭22-26</p> <p>▷ 今尾景年「老松」を描く。 落款</p> <p>▷ 富田溪仙、5月琉球へ旅し、第3回院展に「沖繩三題」を出品。 富田溪仙遺作展目録</p> <p>▷ 幸野楳嶺20年忌にあたり、東本願寺から嵯峨に敷地をおくられ凌雪園を設け、「楳嶺画僊之碑」を建てる。 楳嶺遺墨</p> <p>▷ 島村久三郎、泉涌寺地区にはじめて開窯。 京焼百年の歩み</p> <p>▷ 友禅、版画風の文様と新橋色が流行、なおこのころ抜染法が発明される(大5～6ごろ)。 友禅の変遷</p> <p>▷ 洋画家二十日会は低調、設立当時の新鮮さを喪失気味。 日出 6・24</p> <p>▷ 批評家、学識者、画家など、この年ごろから各種展覧会批評・美術界批判記事を盛んに美術雑誌、新聞などに掲載。 中央美術 15、16</p> <p>▷ 木工家 堀田瑞松没(天保8生)。 京都の美術工芸100年展目録</p>

参 考 日 本

京	都	府
<p>1・13 青年画家の団体七曜会第2回小品展、大丸に開催（板倉星光「つれづれ」・「春宵」、堀井香坡など出品）。 日出 1・14</p> <p>2・10 陶器研究団体好陶会第1回例会、松風嘉定宅に開催（以後月10日に開催）。 日出 2・12</p> <p>2・一 沢田宗山、桃山に新居を構え、宗和園と称す（作陶に従事、翌7年丹波橋に築窯）。 京都工芸大観</p> <p>2・一 北大路魯山人、京都から北鎌倉の岡崎家に移る。 北大路魯山人の人と芸術展目録</p> <p>2・一 竹久夢二、東京から京都清水二年坂に來住。 日出 2・6</p> <p>3・4、5 後素協会小品展、八坂俱樂部に開催。 日出 2・22</p> <p>3・13、14 山元塾早苗会第18回展、第2勸業館に開催（川村曼舟「白雲重疊」、庄田鶴友「浦の朝」、小村大雲「宇治川先陣」、林文塘「水郷」・玉倉春輝「閑庭」・山下竹斎「水郷」など95点出品。 日出 3・15</p> <p>3・一 田村宗立、横浜の原六郎の依頼により屏風一双を揮毫中。 日出 3・4</p> <p>4・1～5・31 京都博覧会、京都博覧協会および京都美術協会共催で岡崎第1・第2勸業館に開催。 京都博覧協会史略、日出 5・12</p> <p>4・一 速水御舟、京都に移る（大10東京へ移住）。 現代日本美術全集 5</p> <p>5・1 日本画家 前川文嶺没（享年81、知恩院勢至堂に葬る）。 京都名家墳墓録</p> <p>5・10 橋本関雪・金鳥桂華、神戸から中国へ赴く。 美術新報 274</p> <p>5・16 評論家 中川四明没（京都生、名重麗、号霞城、享年67、光林寺に葬る）。 日出 5・17</p> <p>5・25～27 太田喜二郎作品展、京都商業会議所に開催（内藤湖南・内貴清兵衛・深田康算・鈴木馬左也らの発起による。作品58点を陳列）。 美術新報 274</p> <p>5・一 須田国太郎、京都帝国大学独文学講師ヘルフリッヒに自習を諫められ、関西美術院に入学（都鳥英喜・沢部清五郎についてデッサンを習う）。 須田国太郎</p> <p>5・一 木島桜谷、住友家新邸用に屏風「杜若」を完成。 日出 5・7</p> <p>6・11 京都から富岡鉄斎（絵画）、山元春挙（絵画）、伊東陶山（陶工）、初代諏訪蘇山（陶工）、帝室技芸員に任命される。 京都美術 42、museum 202</p> <p>6・一 竹内栖鳳、神戸山本家へ金屏風「若松」一双を完成。 日出 6・27</p>	<p>7・7～8 後素協会小品展、八坂俱樂部に開催（今尾景年「雨中柳鷺」、三宅呉暁・西村秀岳ら出品。 日出 7・8</p> <p>7・16 府献上の今尾景年筆「晴天鶴」屏風、府庁で公開。 日出 7・15</p> <p>8・13 竹内栖鳳作の屏風完成し東京へ発送（宮内省官吏から片山前内匠頭へ寄贈するもの）。 日出 8・14</p> <p>8・13 太田喜二郎、市立絵画専門学校講師に嘱託される。 日出 8・14、太田喜二郎遺作展図集</p> <p>9・6 蒔絵師 戸島光孚没（明15生）。 日出 9・9</p> <p>10・10 西陣染織研究会、創立総会を西陣織物同業組合に開催。 西陣染織研究会</p> <p>10・16～11・20 第11回文展⁽¹⁾（竹内栖鳳「日稼」を出品、村上華岳は「白頭翁」を出品するが鑑別される。11・27～12・11京都陳列会を岡崎勸業館に開催）。 日本美術年鑑 昭15</p> <p>10・17～21 第2回浮世絵版画陳列、京都同好会主催で、府立図書館に開催（以後大正年間、毎年浮世絵展が催される）。 日出 10・18</p> <p>10・18 沢村専太郎、アジャント石窟寺内壁画の模写監督としてインドへ出発。 中央美術 26</p> <p>10・20～11・10 第4回院展京都陳列会、第1勸業館に開催（富田溪仙「風神雷神」・「淀」、速水御舟「洛外六題」など）。 日本美術院史</p> <p>10・31～11・14 第4回二科展京都陳列会、府立図書館に開催（梅原龍三郎の作品20点を別室に陳列、安井曾太郎「女」、梅原龍三郎「静物」・「青きコルサージュ」、岸田劉生「初夏の小路」、津田青楓「さくら頃」、キュービズム・未来派の作品も展示）。 日出 10・25、11・2～5</p> <p>11・15～27 第15回関西美術会展、第1勸業館に開催（油絵75点、水彩画28点、工芸品少し鑑査を非常に厳密にする。伊藤快彦・寺松国太郎・太田喜二郎・都鳥英喜・沢部清五郎・新井謹也ら、東京から河合新蔵、大阪から赤松麟作ら）。 日出 11・18～21</p> <p>11・22～24 船川末乾、洋画展を京都帝大学生集会所に開催（28点を展示）。 日出 11・24</p> <p>11・一 植田寿蔵、このころ大畑後素堂にて週1回美学講義を行なう（20日「傾向的美術と郷土的美術」、27日「ターナーの本体」）。 日出 11・21、28</p>	
<p>この年</p> <p>▷ 竹久夢二、羽子板会を堺町三条南緑江花園内に設立。 美術之日本 大7:1</p> <p>▷ 上村松園、秋皇太后宮京都へ行啓のとき、公会堂にて「初春図」を制作。 日本美術年鑑 昭22-26</p>		

参	考	日	本
(1)第11回文展 審査委員（京都関係のみ） 審査員出品 竹内栖鳳「日稼」 日本画 川村曼舟「日本三景」、池田桂仙「武陵桃源」、川北霞峰「吉野の奥」、西山翠嶂「短夜」、橋本関雪「倪雲林」、小村大雲「神風」 日本芸術院史 入選 第1部 日本画 「夏山二題」高山春凌、「白川越」中居曠谷、「清境」松永冠山、「静山」松本仙挙、「月ヶ瀬」浦島春濤、「北山時雨」上田万秋、「梅雨霽れ」榊原紫峰、「狸」疋田芳沼、「蓮華」菊池契月、「羅浮」田畑秋濤、「はぜの木」大村広陽、「豊作の瑞兆」山元春汀、「大潮の路」都路華香、「三室堂」武内逸江、「吉野」森月城、「春禽趁晴図」土田麦僊、「夏」平井棋仙、「蓮の糸」井村方外、「孟宗蕨」木島桜谷、「海三題」西井敬岳、「月四題」(4枚)庄田鶴友、「秋田露と為朝百合」広江霞舟、「古都の春」山下竹斎、「春興」玉倉春輝、「花の頃」山口松斎、「秋の囁き」井上素塔、「舞台のかけ」吉川観方、「桜町中納言」西堀力水、「老松」千種掃雲、「春光」山田耕雲、「凌霄花」福山聿水、「夾竹桃の庭」橋本虹影、「一炊の夢」三木翠山「夢現」佐藤光華、「秋興」本多万翠、「雷鳴」堀井香坡、「暮春、行秋」八田高容、「朝」竹内鳴鳳、「孔雀」牧皎堂、「きじはと」岡本蕉雨、「夏雨新霽」河野秋邨、「寂光の都」小早川秋声、「藤なみ」人見少華、「陸しき日送り」北上聖牛、「清秋」合田一峰、「老いたる梅」沢白鷗、「献灯」不動立山、「川辺」山本紅雲、「晚春」吉田硯堂、「白雨」武田波葉、「楽園」近藤乾年、「神苑」大橋三岐、「日ざかり」柴田方明、「青鸞」岡本芳水。 第2部 西洋画 「田植」・「四月の野」太田喜二郎、「C博士令嬢」服部喜三、「雛と積葉」飯田陽。 第3部 彫刻 「大ぞら（木彫）」石本曉海。 美術新報 17:1	<p>2・17 日本画家 野口小蘋没（弘化4生、享年71）。</p> <p>4・15 阿部次郎、『美学』を著わす。</p> <p>4・23 日本画家 梶田半古没（明3生、享年48）。</p> <p>4・一 村上槐多、日本美術院試作展に「湖水と女」、素描「コスチュームの娘」を出品して美術院賞を受ける。</p> <p>5・30 文部省告示第110号をもって美術展覧会規程改正、同一人の出品点数を2点以内に制限。</p> <p>5・一 狩野芳崖三十年遺墨展、丸の内に開催。</p> <p>6・9～11 第6回京都三園展（遊陶園・京漆園・道楽園）、東京農商務省商品陳列館に開催、（清水六兵衛・伊東陶山・河村蜻山・宮永東山らの陶磁器、武田五一・間部時雄・水木平太郎らの応用図案など）。 中央美術 22</p> <p>6・11 下村観山・寺崎広業・川合玉堂・富岡鉄斎・小堀鞆音・新海竹太郎・伊東陶山ら11人帝室技芸員となる。</p> <p>8・15 大倉集古館開館（赤坂、大倉喜八郎、喜七郎収集の東洋美術品、書籍を展示、我国最初の私立美術館）。</p> <p>8・17 西洋美術史家 岩村透没（明3生、享年48、著書は、『パリの画学生』・『西洋美術史要』など）。</p> <p>9・6 森鷗外ほか26名美術審査委員会委員仰せつけらる。</p> <p>9・9～30 第4回二科展、竹之台に開催（立体派風の万鉄五郎「もたれて立つ人」、未来派風の東郷青児「狂ほしき自我の跳躍」、神原泰の作品などが注目される）。</p> <p>9・10～30 第4回院展、竹之台に開催（大観「雲去来」、古径「竹取物語」、溪仙「淀」、速水御舟「洛外六題」、竜子「神戦の巻」など、この年6月小川芋銭・北野恒富・山本鼎・9月御舟・竜子、戸張孤雁を同人に推挙）。</p> <p>9・一 村上槐多、美術院展に「乞食と女」を出品、10月には院友に推される。</p> <p>10・1～20 第5回農展、農商務省商品陳列館に開催（出品総数1,062点、図案384点、内東京216点、京都29点、応用作品、内東京362点、京都90点で、京都の出品非常に少ない）。</p> <p>10・16～20 第11回文展、竹之台に開催（百穂「予讓」、広業「白馬八題」、金山平三「氷すべり」、太田喜二郎「田植」など、特選受賞者は鎌木清方ほか24名）。</p> <p>11・7 〔露歴10・25〕ロシア10月革命。</p> <p>12・1 日本画家 池田蕉園没（明19生、享年32）。</p>		
▷ 山元春挙、立太子式 御用三帽対「晴天の鶴」、宮内省御用「山二題」、賀陽宮家御用御屏風などを揮毫。 都市と芸術 240	▷ 浜田庄司、市立陶磁器試験場に技手として勤務、河井寛次郎と共に研究に専念する。 現代の眼 179	▷ 日本画家 村瀬玉田没（享年66）。 明治美術名作集	

京	都	府
<p>1・10 西陣染織研究会第1回会合を西陣織物同業組合事務所で開催（ほぼ毎月1回例会として西陣染織業関係の公開講演会を開催）。</p> <p>西陣染織研究会</p> <p>1・16 小野竹橋・土田麦麩・村上華岳・野長瀬晩花・榊原紫峰ら国画創作協会の発会式の挨拶をかねてその理由書を発送（国画創作協会設立の事情をのべる）。</p> <p>理由書</p> <p>1・18 日本画家 菊池芳文没（文久2・9・17大阪生、名常次郎、享年57、東山興正寺廟側に葬る）。</p> <p>京都名家墳墓録、日出 1・20</p> <p>1・20 国画創作協会発会式、京都ホテルに挙行、宣言書と規約を発表（会員：小野竹橋・土田麦麩・村上華岳・野長瀬晩花・榊原紫峰、顧問：竹内栖鳳・中井宗太郎、21日東京上野稽養軒においても発会式を挙行）。</p> <p>国画創作協会宣言書並ニ規約、日出 1・21</p> <p>1・29 日本画家 鈴木松年没（享年70、東山一心院に葬る）。</p> <p>京都名家墳墓録、書画骨董雑誌 107</p> <p>2・7 川村文芽・上野清江ら実業者と計り友禪染の始祖宮崎友禪齋の謝恩を企画、その発会会を瑞蓮寺に開催（3・7友禪史会と改称）。</p> <p>友千鳥</p> <p>2・10、11 後素協会小品画展、八坂倶楽部に開催（今尾景年「嵐山」、三宅呉暁「月夜梅」、西村秀岳「嵐山」、山下竹斎「嵐山」、千種掃雲「雪の人」、上田万秋「雉子」など出品）。</p> <p>日出 2・11</p> <p>2・11 京人形青年会発会式。日出 2・4</p> <p>3・19～21 早苗会第19回展、第2勸業館に開催（出品数128点、小早川秋声「生の執着」、岡文濤「よき潤」など）。</p> <p>日出 3・20</p> <p>3・20 鹿子木孟郎、仏国からニューヨークを経て帰国（5月下鴨に居を定め、アカデミー鹿子木下鴨画塾を開く）。中央美術 31、鹿子木孟郎小伝</p> <p>4・1～5・31 京都博覧協会および京都美術協会、京都博覧会を岡崎勸業館に開催。</p> <p>京都博覧協会史略</p> <p>4・11～20 竹久夢二作品展、府立図書館に開催。</p> <p>京都美術 45、竹久夢二抒情画展目録</p> <p>4・17 入江波光、市立絵画専門学校助教授となる（菊池契月の助手となる）。</p> <p>日本美術年鑑 昭22-26、入江波光展目録、双葉</p> <p>7・10 洋画家・仏画家 田村宗立没（弘化3・8・20 船井郡園部生、号月樵、享年73、建仁寺内久昌院に葬る）。</p> <p>京都美術 46、日出 11・12</p> <p>7・18 中沢岩太、京都高等工芸学校々長を辞任、代って鶴巻鶴一が就任。</p> <p>実業教育50年史</p> <p>7・31 江馬務、市立美術工芸学校教諭を退職する。</p> <p>双葉</p> <p>8・22 木島桜谷・菊池契月、市立絵画専門学校教授となる。</p> <p>同上</p> <p>8・末 黒田重太郎、帰国。京都洋画の黎明期</p>	<p>10・14～11・20 第12回文展⁽¹⁾（菊池芳文に代って、今回より菊池契月が審査員となる。竹内栖鳳「河口」は卓抜な技巧の冴えがみられ、低調な中に出色。11・27～12・11京都陳列会を岡崎勸業館に開催）。</p> <p>日本芸術院史</p> <p>10・15～31 第5回二科展京都陳列会、府立図書館に開催（出品数126点、普門暁・東郷青児らの新傾向の作品も展示）。</p> <p>京都美術 46、日出 10・16</p> <p>10・20～11・10 第5回院展京都陳列会、第1勸業館に開催（富田溪仙「南泉斬猫・狗子仏性」、速水御舟「修学院村」など）。</p> <p>日本芸術院史</p> <p>11・10 美工会創立10年記念展、市立美工に開催。</p> <p>京都美術 47、日出 11・11</p> <p>11・16 陶芸家 2代清水七兵衛没（京都生、享年74）。</p> <p>都市と芸術 208</p> <p>11・27～12・11 国画創作協会展⁽²⁾ 第1勸業館に開催（出品点数21点、うち会員5、入選9、選外7、国画賞「降魔の図」入江波光、梶牛賞「水蜜桃」金田和郎）。</p> <p>京都美術 47、美術之日本</p> <p>11・29～12・4 白樺社美術展、府立図書館に開催（ロダンの彫刻小品3点、ラムの素描、名画の複製350点を展示）。</p> <p>日出 11・30、京都美術 47</p> <p>12・5～11 国展出品画家作品展、平安書房・祇園荘に開催。</p> <p>京都美術 47</p> <p>12・20 機業家 3代川島甚兵衛没（明12・5金沢生、享年40、寺町四条下丸大雲院に葬る）。</p> <p>川島家と其事業、日出 12・23</p> <p>12・一 中井宗太郎・竹内逸・黒田重太郎ら、雑誌『制作』創刊（「美の問題について」阿部次郎、「ルネッサンス以後」土田杏村、「人間の美的教育を論ずる書」安倍能成、「夢殿の救世観音」中井宗太郎、「セザンヌ」ヴォラール、大10まで）。</p> <p>制作創刊号</p> <p>この年</p> <p>▷ 富岡鉄斎、この前後「群仙高会図」のような彩色の大作を多く描く。</p> <p>鉄斎</p> <p>▷ 友禪、華美な刺繍箔押しした桃山慶長紋様流行。またこの頃から友禪の着尺図案が行なわれはじめる（大7～8頃）。</p> <p>友禪の変遷</p> <p>▷ 「美術の秋」という言葉がこの年ごろからはやり、岡崎公園は各種展覧会でにぎわうようになる。</p> <p>日出 11・一</p> <p>▷ 浜田庄司、河井寛次郎と琉球に渡り、陶器の製作状況を調査（翌8年、河井と朝鮮・満洲を旅行）。</p> <p>現代の眼 179</p> <p>▷ 西村五雲、病臥のまま、小品制作をはじめ</p> <p>五雲、日本美術年鑑 昭15</p> <p>▷ 河合卯之助、最初の個展を京都商業会議所に開催（以後しばしば個展を開催）。</p> <p>河合卯之助作品集</p>	

参	考	日	本	
(1)第12回文展（京都関係のみ）	審査員 竹内栖鳳・山元春峯・菊池契月 審査員出品 「河口」竹内栖鳳、「夕至」菊池契月 特選 「落梅」西山翠嶂、「熱国妍春」石崎光瑠 入選 「荒れ模様」庄田鶴友、「八瀬」八田高容、「風ひかる」武田鼓葉、「天変地異」天井樑仙、「浙江所見」高倉観崖、「懺悔」中村大三郎、「怒濤」山元春汀、「閑寂なる露、地の秋装」山中芳谷、「朝あらし」中村春楊、「戰場原」西井敬岳、「寧楽春秋」岡本芳水、「角とぐ鹿」山口華楊、「涼風」橋本虹影、「小子部」疋田芳沼、「祇園会」三木翠山、「今朝の秋」渡辺公観、「金閣創建」山口呉川、「コスモス」梅谷華那、「百日紅」渡辺幾春、「微笑」小早川秋声、「蘇州二題」林文塘、「蕃薯寮郊外」大村廣陽、「白馬の御花畑」高橋秋華、「ひなが」古谷一晁、「収獲」玉舎春輝、「智恵頂ける児」谷角雪斎、「澗河の春」川島梅丘、「居竹軒」平井寒泉、「山村に春近し」吹田草牧、「仙山楼閣」小田碧洋、「高山四趣」川畑春翠、「鶏冠花」東原方麩、「郡鷲」本田萬翠、「奈良二題」中島春鷗、「鬼城山」松本仙擧、「寂光」田畑秋濤、「楚蓮香」佐藤光華、「雨の瀬田川」徳田隣斎、「演芸所見」三宅呉月、「ふたば」伊藤小坡、「柿若葉」島村舜年、「温泉宿と其附近」森月鏡、「吹雪したあと」田中啓岳、「消えゆく暮の鐘」和気春光女、「すなごりの浜」山下竹斎、「刀鍛冶」一ノ瀬古溪、「海の夏」高山春凌、「宇治の茶摘」柴田晩葉、「小六月」八百谷其雲、「呂宋島三題」井口華秋、「雁来紅」榊原苔山、「曇る海」岡田泰祥、「聴音」紺谷光俊、「叢」大島桂華、「船路」佐々木春浪、「社壇詣で」山城江観			<p>1・20 国画創作協会発会式、京都倶楽部に挙行（土田麦麩・小野竹橋・村上華岳・野長瀬晩花・榊原紫峰ら。11・1～15第1回展、白木屋に開催（麦麩「湯女」、華岳「聖者の死」、入江波光「降魔」、竹橋「波切村」）。</p> <p>1・一 津田青楓、小説歌集の装幀図案（漱石の『道草』、『明暗』などの）を製作する。</p> <p>4・2 日本画家 渡辺省亭没（嘉永4生、享年68）。</p> <p>4・一 日本創作版画協会結成（山本鼎・織田一磨・戸張孤雁・寺崎武男ら。大8・1・20～24、第1回展を三越に開催）。</p> <p>6・7～9 京都三園（遊陶園・京漆園・道楽園）工芸作品展、東京農商務省商品陳列館に開催。</p> <p>中央美術 34</p> <p>9・9～30 第5回二科展、竹之台に開催（岸田劉生「川幡氏の像」、関根正二「信仰の悲しみ」・「姉弟」・「自画像」を出品し梶牛賞を受ける）。</p> <p>9・10～30 第5回院展、竹之台に開催（大観「千与四郎」、古径「いでゆ」、軫彦「御夢」、御舟「修学院村」など、この月中原梯二郎を同人に推挙）。</p> <p>10・10～11・30 従来農商務省陳列館において毎年開催の図案及応用作品展は、工芸展覧会と改称、その規模を大にして上野不忍池畔日産奨励会陳列館に催す。</p> <p>10・14～11・20 第12回文展、上野竹之台に開催（栖鳳「河口」、清方「ためさるる日」、松園「焰」、松岡映丘「山科のやど」、川村曼舟「古都の春」、西山翠嶂「落梅」、橋本関雪「木蘭」、黒田清輝「赤小豆の籾分」、藤島武二「草の香」、片多徳郎「花下竹人」、北村西望「来る日の夢」など）。</p> <p>10・22 第12回美術展覧会特選受賞者は松岡映丘ほか18名であった。</p> <p>12・14～23 草土社第6回展、赤坂三会堂に開催（岸田劉生「麗子肖像」・「村娘の図」・「卓上林檎葡萄の図」）。</p> <p>この年</p> <p>▷ 梅原龍三郎、第5回二科展後二科会々員を辞任、しかしその後も出品を続ける。</p>
(2)国画創作協会第1回展覧会	会員 「波切村」小野竹橋、「湯女」土田麦麩、「聖者の死」村上華岳、「初夏の流」野長瀬晩花、「青梅」榊原紫峰、「降魔」入江波光、「島」伊藤草白、「口紅」岡本神草、「横櫛」甲斐莊楠音、「水蜜桃」金田和郎、「赤毛遊蕩」粥川伸二、「梧桐」松坂春久、「風景」榊原始更、「わかき松」白山春邦 選外 「犯罪者」西山更華、「暮れいく停留場」梶原緋佐子、「潮音、長閑」長瀬義朗、「女三人」山脇抱玄、「快晴」森谷南人子、「松原」津田藤太郎		同展覧会画集	

京	都	府
1・8～10 京都美術倶楽部落成披露式を挙行。 京都美術 47	5・19 市立絵画専門学校・市立美術工芸学校 へ皇后陛下行啓。 美術之日本 大8・5・91	
1・一 佳都美会、組織を改め、佳都美村と改称 (村人は百姓がその分に安んじ耕耘に専念する ように、美術工芸製作のみに尽くすことを決意。 〔年寄〕神阪雪佳、〔陶器師〕清水六兵衛・河村蜻 山・伊東陶山・宮永東山、〔塗師〕三木表悦・鈴 木表朔・岩村貞蔵、〔蒔絵師〕木村秀雄・神阪祐 吉・江馬長閑・吉田金英・山田栞全・岩村貞次郎 ・丹羽藤橋・吉田光村・山田博光・奥村亨、〔彫 刻師〕石本曉海、〔金物師〕秦常三郎・古市卯之 助、〔指物師〕一瀬小兵衛・中村善一)。 日出 1・18	5・22～26 第1回佳都美村作品展 中央美術 46	
2・10、11 後素協会小品画展、八坂倶楽部に 開催。 京都美術 47	5・28 鈴木百年・松年追悼展、永観堂・画仙 堂に開催。 京都美術 48	
2・21～25 西洋名画複製展、梧桐社主催で府 立図書館に開催。 同上	6・4 初代伊東陶山、東宮殿下(今上天皇) 御成年奉祝記念として古陶器38点を京都帝室博物 館に献納。 京都工芸大観	
2・一 須田国太郎、神戸から外遊の途につく (3月カルカッタで下船し、アジャンタを訪問、 6月イギリス着、同月末パリに行き、7月マドリ ッド到着、以後4年、ここに居を構えプラド美術 館にかよい、模写をするかたわら、欧州各国を歴 訪各地で制作)。 須田国太郎	6・5～8 京都三園(遊陶・京漆・道楽)展、 東京農商務省商品陳列所に開催(高橋清山・宮永 東山・清水六兵衛・野口安左衛門・広岡伊兵衛ら 作品数百点を陳列)。 中央美術 46	
3・9～22 波蘭画家ジェレラスキー作品展、 国民美術協会主催で府立図書館に開催。 京都美術 47	6・15～17 早苗会20年記念展、第2勸業館に 開催。 京都美術 48、日出 5・15、16	
3・27 都鳥英喜、神戸からロンドン経由で渡 仏(主としてパリ郊外のヴィロンクールにて制作、 大11帰国)。 中央美術 43、京都洋画の黎明期	7・6、7 後素協会小品画展、八坂倶楽部に 開催。 京都美術 48	
3・28 図案家 古谷紅麟遺作展、市公会堂に 開催。 京都美術 47	8・10 関西図案会解散。 近代友禅史、京都美術 48	
4・1 市立染織学校、染織2科以外に工業化 学科などを加え、市立工業学校と改称。 実業教育50年史	8・26 日本画家 三宅呉暁没(元治1京都生、 名清三郎、享年56、出水七本松東の本昌寺に葬る)。 京都名家墳墓録	
4・1～5・31 全国染織工業博、京都博覧協 会および京都美術協会共催で第1・第2勸業館お よび京都商品陳列所に開催(祇園会の雞鉦ゴブ ラン織見送りなど出品)。 京都博覧協会史略	9・8 竹内栖鳳・山元春挙・富岡鉄斎・今尾 景年ら帝国美術院会員となる。 日本芸術院史	
4・4 市立陶磁器試験場、陶磁器試験所官制 公布により、農商務省所管国立陶磁器試験所に移 譲昇格(大9・1・15正式に市試験場は廃止と決定、 初代所長は植田豊橋、昭27名古屋に移転となり廃 止)。 農商務省告示74号、松風嘉定、市告示 513号	9・17 日本画家・巨勢小石没(天保14・9・28 京都生、名金起、東山西大谷に葬る)。 京都名家墳墓録、日出 9・30	
4・27 一六居士遺墨展、市公会堂に開催。 京都美術 47	9・20～10・10 第17回関西美術会展、第2勸 業館に開催(伊藤快彦「青海原」、寺松国太郎「サ ロメ」、河合新蔵「林和清の遺跡」、太田喜二郎 「柿紅葉」・「バルコンの女」、黒田重太郎「サン ・クルウ」・「洗濯場」、長谷川良雄「桃山」、加藤源 之助「波切村の紅葉」など。洋画は160点を展示)。 日出 9・22	
5・1～3 麗日会展、府立図書館に開催。 京都美術 48	9・一 黒田重太郎、第6回二科展に滞欧作10 余点を出品、二科賞をうけ二科会会友となる(「ケ ルグロエの夏」など。また「裸体習作」は撮影禁 止となる)。 京都洋画の黎明期、日出 9・1	
5・17～19 谷口香嶠遺墨展、美術倶楽部に開 催。 同上	10・14～11・20 第1回帝展 ⁽¹⁾ (文展時代の老 大家は会員となり、菊池契月・橋本関雪・西山翠 嶂・川村曼舟らが新審査員となる。土田麦穂・田 近竹邨・川北霞峰・小村大雲が帝展無鑑査出品に 推薦される。11・27～12・11京都陳列会、岡崎勸業 館に開催)。 日本芸術院史	

参	考	日	本
(1)第1回帝展(京都関係のみ) 審査委員 (日)菊池契月・(日)橋本関雪・(日)西山翠嶂・ (洋)太田喜二郎・(日)川村曼舟 審査員出品 橋本関雪「郭巨」・「遊踪四題」、菊池契月「庭 の池」、西山翠嶂「春霞」、太田喜二郎「夏の昼」 ・「簀」 特選受賞者 日本画 石崎光瑠「燦雨」	日本芸術院史	2・20 洋画家・詩人 村山槐多没(明29・9・ 15横浜市生、享年24)。 2・21 日本画家 寺崎広業没(慶応2生、享 年54)。 4・27 山本鼎、長野県神川村小学校で児童自 由画展(自由画教育運動提唱)。10月同村に日本 農民美術研究所設立。大9・5・28～30まで同所生 徒製作の日本農民美術展を三越に開催。 4・一 白樺10周年記念岸田劉生個展。 4・一 史蹟名勝天然記念物保存法制定。 6・16 洋画家 関根正二没(明32生、享年21、 同年9・3～29 遺作展)。 9・1～28 第6回院展、上野竹之台に開催 (観山「東坡先生」、大観「喜撰山」、古径「麦」、 小川芋銭「樹下石人談」、足立源一郎「青き眼の 女」、未醒「出関老子」、中原悌二郎「若きカフ カス人」など、洋画部に足立源一郎を新同人に推挙 する)。 9・1～30 第6回二科展、竹之台に開催(小 出楯重「Nの家族」、関根正二「慰められつつ悩 む」、藤川勇造、会員に推され彫刻部を新設)。 9・5 明治40年勅令第220号美術審査委員会 官制を廃止し勅令第417号をもって帝国美術院規 程を制定。9・8 院長森鷗外、会員に鞆音・玉堂 ・栖鳳・春挙・鉄斎・景年・楓湖・光雲・新海・ 黒田・岡田・和田・不折を任命、大観・観山固辞)。 9・19 福原録次郎、帝国美術院美術展覧会審 査委員長となる。藤島武二ほか23名帝国美術院美 術展覧会審査委員仰せつけらる)。 10・14～11・20 帝国美術院第1回美術展覧会 (帝展)、竹之台に開催(荒木十畝「黄昏」、広島 見甫「青衣の女」、藤島「カムピドリオのあたり」、 片多徳郎「霹靂」、斎藤素巖「朝暎」、吉田三郎 「老坑夫」など)。 10・15～25 国画創作協会第2回展、白木屋に 開催(麦穂「三人の舞妓」、華岳「日高河」、紫峰 「赤松」など)。 11・10 日本自由画壇(井口華秋ら)、京都に 結成、大9・10第1回展を三越に開く)。 11・11 村山槐多遺作展、友人の発起により開 催、14日兜町兜屋画堂に追悼会)。 11・一 黙語追悼会、東京上野常盤花壇に開催、 浅井忠の遺作を陳列)。	

京 都 府	
<p>10・17～11・2 第6回二科展京都陳列会、府立図書館に開催（黒田重太郎14点、齋藤「雨後の夕」、安井曾太郎「春」・「ダリヤ」、出品総数124点、二科会と京都洋画界との結びつき密接となる）。 日出 10・17、京都洋画の黎明期</p> <p>10・一 第6回院展京都陳列会、第2勸業館に開催（富田溪仙「嵯峨八景」、真道黎明「春日山」など）。 日本美術院史</p> <p>11・3～8 小早川秋声渡歌記念展、大阪真賀根美術館に開催。 日出 11・4</p> <p>11・10 林文瑯・井口華秋ら、日本自由画壇を創設、万養軒に発会式挙行（設立宣言に「此際結社せるは何かある。大なるものに反抗すべき性質をもつと誤解されるが、何等他の拘束を受けず同人自由の製作を発表する機関を作ったに過ぎません。言はゞ個人展覧会の集合団体と見て貫ってよるしい……」）と述べる。同人池田桂仙・井口華秋・伊藤小坡・猪飼嘯谷・林文瑯・西井敬岳・渡辺公観・加藤英舟・高山春凌・玉舎春輝・上田万秋・植中直斎・小村大雲・水田竹圃・庄田鶴友・広田百豊。同時に文学博士榊亮三郎を顧問とし、和田孝治・上田万次郎を評議員に推薦）。 日出 11・10</p> <p>11・15、16 龍村平蔵織物展、東京日本倶楽部に開催（糸織・漢錦・倭錦・御代錦・縹縹織・推朱織・螺細織・金唐草錦・無錦織などを出品、これらは、単なる模作でなく、蒔絵・螺細・七宝・洋画の技巧を巧みに織物に生かしたもの）。 中央美術 51</p> <p>11・18～22 白樺社主催ブレーク版画展、京大基督教青年会館に開催（白樺美術館設立費にあてるため）。 京都美術 48、日出 11・19</p> <p>11・21～23 平安同好会主催関西書道大会、市公会堂に開催。 京都美術 48</p> <p>11・27～12・1 第2回国画創作協会展⁽²⁾、第1勸業館に開催（出品点数17点、うち会員7、入選5、選外5、梶牛賞「牡丹」伊藤草白、この回から入江波光を会員に推挙）。 日出 11・26、美術之日本 大8・12</p> <p>11・29 岡本清彦（祖山末吉）、帝展京都陳列会展示作品10点に墨汁をぬる（菊池契月・広島晃甫・田畑秋濤・石崎光瑠らの作品）。 京都美術 48</p> <p>11・一 日本自由画壇、加藤英舟を除名、松村梅叟を壇友に推薦。 京都に於ける日本画史</p> <p>12・6 京大友会講演部、帝展国展批評大講演会を開催（黒田重太郎・植田寿蔵ら）。 日出 12・7</p> <p>12・18 神阪雪佳 および 江馬長閑、東宮殿下（今上天皇）立太子式に際し、皇后宮から御祝の</p>	<p>文台重硯箱を製作し、奨美会会員に展示する。 雪佳遺作集、日出 12・19</p> <p>12・一 陶工団体赤土社創立（楠部弥弼・道林俊正・河村喜太郎・河合栄之助・荒谷芳景・八木一艸ら。宣言文「忘我の眠りよりさめず、因襲的な様式に拘泥せる陶工を謳歌し讚美するは、われらの生涯としてあまりに悲惨なり。ここに赤土会同人は自然の美の深奥を各自の愛をもって探究し、永遠に亡びざる美を陶器なる芸術によって表現せんとする、やむ能はざる真意の発動により、神秘の光を求めて生れたるなり。」大14・3 自然消滅）。 都市と芸術 222</p> <p>この年</p> <p>▷ 野沢如洋、欧米美術行脚に出発(大9 帰国)。 日本美術年鑑 昭13</p> <p>▷ 水田竹圃、大阪から京都に移住。 日本美術年鑑 昭34</p> <p>▷ 山口華楊、市立絵画専門学校卒業後、師西村五雲の勧めにより竹内栖鳳塾竹杖会に参加。 山口華楊作品集</p> <p>▷ 北脇昇、鹿子木下鴨家塾に入塾。 日本美術年鑑 昭27</p> <p>▷ 黒田重太郎、関西美術院に教鞭をとる。また「南仏蘭西紀行」および「セザンヌ以後—最近仏国絵画の推移に就ての感想—」を雑誌『中央美術』に連載。 中央美術 42-48</p> <p>▷ 船川末乾・園頼三、共著の詩画集『自己陶醉』を出版（「絵の中に詩がなければならぬ」をモットーとする。大9『蒼空』を出版）。 異色の近代画家たち展目録</p> <p>▷ 米沢蘇峰、叔父にあたる初代諏訪蘇山の門に入り、陶法を学ぶ。 京都工芸大観</p> <p>▷ 初代伊東陶山、滋賀県膳所焼の再興のため、山元春挙および地元の岩崎健三らと相はかり新窯を築く（大9・3 完成）。 京都工芸大観、初代陶山小伝</p> <p>▷ 中村鷗生、山鹿清華に師事し染織図案を学ぶ。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 友禪、にわかには新しい表現派・未来派などの欧州図案を吸収（まもなく衰える）。 近代友禪史</p> <p>▷ 沢村専太郎、京大文学部美学美術史講座で、日本・東洋の美術史を講義。植田寿蔵は西洋美術を講義（大11、助教授就任）。 京都大学70年史</p> <p>▷ 桜山荘庭園、中郡峰山町字菅に起工（大正末年竣工、設計者は吉村伊助および造園師本井正五郎、借景式庭園）。 京都の明治文化財</p>

参 考	日 本
<p>(2)国画創作協会第2回展覧会 会員 「臨海の村」入江波光、「夏の五箇山」・「風景」小野竹橋、「三人の舞妓」土田麦穂、「日高河」村上華岳、「休み時」野長瀬晚花、「赤松」榊原紫峰、「北木島」伊藤草白、「猫」稲垣仲静、「牡丹」岡村宇太郎、「雪に埋れつつ正月は行く」酒井三良、「伊豆夏景」吹田草牧 選外 「松並木」伊藤柏台、「舞妓」津田藤太郎、「静寂」山口草平、「椿」山下馬山、「朝」森谷南人子 同展覧会画集</p>	<p>この年 ▷ 藤田嗣治（大2 渡仏）、パリのサロン・ドートンヌに入選、会員となる。</p>

京	都	府
1・1 市立陶磁器試験場附属伝習所、試験場の国への移管に伴い市立陶磁器伝習所となる。 市告示21号		画)。 日出 9・17
1・一 日本自由画壇、文学博士内藤虎次郎を講師として講演会開催（また伊藤小坡の脱退を承認）。 京都に於ける日本画史		10・4 黒田重太郎著『セザンヌ以後』出版の記念会、万養軒に開催（主催は中井宗太郎・竹内逸三）。 日出 10・6
3・20～5・20 京都博覧協会創立50周年記念および京都美術協会創立30周年記念のため、両協会主催で、全国勸業博を岡崎勸業館および商品陳列所に開催。 京都博覧協会史略		10・10 京都博覧協会50周年記念式を市公会堂に挙行、次の12人を功勞者として表彰（大村彦太郎・熊谷直之・小篠長兵衛・杉浦三郎兵衛・西村治兵衛・飯田新七・丹羽圭介・西村総左衛門・内貴甚三郎・矢代庄兵衛・木村勘兵衛、伊東陶山）。 京都博覧協会史略
3・30 漆器業 三上治助没（享年70）。 日出 4・8		10・13～11・20 第2回帝展 ⁽¹⁾ （木島桜谷が審査員に加わる。山田耕雲・西村五雲ら推薦となる。竹内栖鳳「薫風吟行、樹下博戯」（対幅）を出品、11・27～12・11京都陳列会を岡崎勸業館に開催）。 日本芸術院史
3・一 新井謹也、陶磁器研究のため、中国南北および朝鮮を巡遊（6月帰国、陶器制作をはじめ）。 京都工芸大観		10・16～11・5 第7回院展京都陳列会、第2勸業館に開催（富田溪仙「列仙」、速水御舟「京の舞妓」など）。 日本美術院史
3・一 赤土社、旗あげ展を大阪高島屋に開催。 都市と芸術 222		10・16～11・一 第7回二科展京都陳列会、第1勸業館に開催（安井曾太郎「化粧」・「薔薇」、梅原龍三郎「裸婦」をはじめ、東郷青児・国枝金三・小出楯重・ロシア画家シエルバコフらの作品を展示）。 日出 10・17-19
4・3～7 岸田劉生個展、府立図書館に開催。 中央美術 56		10・26 京都美術協会、総会を南禅寺金地院に開催（創立以来30年間在職の役員内貴甚三郎・西村総左衛門・飯田新七・林新助・秦蔵六・丹羽圭介・谷口長次郎・並河靖之・錦光山宗兵衛を表彰）。 日出 10・27
4・29 竹内栖鳳、中井宗太郎・西山翠嶂らとともに中国漫遊に出発（上海・蘇州・杭州・南京・鄭州・北京・朝鮮を經由、7月帰国）。 日本美術年鑑 昭18、美術画報 43: 7、美術之日本 5・20		10・一 市立工業研究所、市の化学工業の促進産業発展のため設置（大12南九条に新築完成、大15窯業部新設）。 京焼百年の歩み
5・3 詩書家 杉聴雨没（享年86、東山泉涌寺御陵下に葬る）。 京都名家墳墓録		11・2～15 第3回国画創作協会展、 ⁽²⁾ 東京白木屋に開催（出品点数19点、うち会員6、会友1、入選2、選外10、梶牛賞伊藤草白「風景」、11・27～12・13 京都展を岡崎第1勸業館に開催）。 日出 11・26
5・4 美術工芸界功勞者 雨森菊太郎没（享年63）。 日出 5・5		11・12～21 日本自由画壇第1回展、 ⁽³⁾ 第1勸業館に開催。 日出 11・12
6・5～7 第21回早苗会、第2勸業館に開催（出品数130点、庄田鶴友「峡中消夏」、高山春凌「たそがれ」、西井敬岳「湯滝」、山下竹斎「洛北四題」、玉舎春輝「夕陽の六甲」など）。 日出 6・5		11・12 陶芸家 4代清水六兵衛没（天保13生、幼名正次郎、享年73）。 京都工芸大観、日出 11・18
7・1 市立陶磁器伝習所、市立陶磁器講習所と改称。 市告示 332号		11・30 間部時雄、絵画研究のため渡欧、出発（英・仏・伊・スイス各国を歴訪、2年間）。 日出 10・20
7・一 初代伊東陶山、山科御陵の畔、鏡山山麓に新窯を完成（大7起工）。 初代陶山小伝		11・一 日本自由画壇、松村梅叟を同人に推挙。 京都に於ける日本画史
8・一 太田喜二郎、京都帝国大学工学部講師を囑託。 太田喜二郎遺作展図集		11・一 霜鳥正三郎、京都高等工芸学校教師となる（洋画を担任、昭5教授）。 京都洋画の黎明期
8・一 森脇忠、第三高等学校図画教師として東京から入洛、西賀茂に居住。 日出 10・24		
8・一 京大工科大学に建築学科が創設される（教授、日比野忠彦・武田五一ら）。 京都大学70年史		
9・24 陶芸家 初代伊東陶山没（弘化3・4・10京都粟田生、享年76）。 初代陶山小伝		
9・一 京都陶磁器商工同業組合、奨励部を設置（意匠・競技・研究・原料調査・技術・地方視察の各部を設け、各種競技会・懇話会開催を計		

参	考	日	本
(1)第2回帝展（京都関係のみ） 審査員 （日）菊池契月・（日）橋本閑雪・（日）西山翠嶂・（洋）太田喜二郎・（日）川村曼舟・（日）木島桜谷 会員出品 竹内栖鳳「薫風吟行・樹下博戯」（対幅） 審査員出品 西山翠嶂「秣」、川村曼舟「三十三間堂」、橋本閑雪「木蘭詩」、菊池契月「少女」、木島桜谷「根岸の里」、太田喜二郎「農夫」 特選受賞者 日本画 中村大三郎「静夜聞香」 西洋画 森脇忠「池畔」 日本芸術院史			1・一 『美術写真画報』創刊（川路柳虹編集、～11月＝10号、博文館）。 5・23～25 佳都美村工芸品展、東京高島屋に開催。 6・6 龍村平蔵作品展、東京生命保険会社協会楼上にて、新研究の結果に成る美術的織物を陳列。 6・14～16 第9回遊陶園京漆園陳列会、東京農商務省商品陳列館に開催。 中央美術 58 7・17～19 足立源一郎小品展、資生堂楼上に開催（昨秋院展に滞欧作品を発表したが、6号以下の小品30点を陳列、「ベトイユの春」・「セース河岸」・「ムードンの冬」・「コロンプの運河」・「サンクルの秋」・「地中海岸」・「プラス・ド・コンコパド」など）。 9・1～29 第7回院展、竹之台に開催（大観「柿紅葉」、御舟「京の舞妓」、恒友「夏の路傍」、平櫛田中「転生」、孤雁「虚無」、同時に仏現代美術展を谷中の日本美術院に開催。9・28 洋画部同人末醒・恒友・山本鼎ら全員脱退し日本美術院洋画部は消滅し、その洋画研究室も閉鎖された）。 9・1～30 第7回二科展、竹之台に開催（石井柏亭「農園の一隅」、小出楯重「少女お梅の像」）。 9・5 東京美術学校出身の新進洋画家川北元英・松林千里・中村元磨・小川千蔵・太田喜二郎・安田稔・吉田苞ら、「燦緑会」なる会を組織、9日まで京橋南伝馬町に第1回展を開く。 9・15～30 狩野芳崖展、帝室博物館に開催、（フェノロサ蔵の「仁王捉鬼図」など）。 9・16～25 未来派美術協会結成、第1回展、銀座玉屋に開催（普門暁・木下秀一郎ら）。 10・1 日本画家 尾形月耕没（安政6生、享年62）。 10・13～11・20 第2回帝展、竹之台に開催、（栖鳳「薫風行吟」、閑雪「木蘭詩」、岡田「支那絹の前」、中村彝「エロシェンコ氏の像」、高間惣七「裏庭」、牧野虎雄「磯」、新海竹太郎「不動」など）。 10・24～26 梅原龍三郎個人展、再渡欧費の一部を得るため、我国最初の試みなる競売の形式によって資生堂楼上に開く。 10・28～11・3 自由画壇展、三越に開催。 10・28 帝国美術院第2回美術展覧会特選受賞者は蔦谷竜岬ほか16名。 11・2～15 国画創作協会第3回展、白木屋に開催（村上華岳「裸婦」など）。
(2)国画創作協会第3回展覧会 会員 「彼岸」入江波光、「海島」小野竹橋、「春」土田麦麿、「裸婦の図」村上華岳、「夕陽に帰る漁夫」野長瀬晩花、「奈良の森」榊原紫峰 入選 「風景」伊藤草白、「漁夫の習作」岡村宇太郎、「海近く」杉田勇次郎 選外 「拳を打てる三人の舞子の習作」岡本神章、「鳥の死」鎌田朝二郎、「人買船」粥川伸二、「風景」多田敬一、「斜陽」村上知加斗、「歌音本の聴衆」山脇抱玄、「母と子」丸岡比呂志、「早春の丘」相生垣秋津、「路」榊原始更、「真鶴の二日」吹田草牧 同展覧会画集			
(3)第1回日本自由画壇展覧会 池田桂仙「秋宵弄笛」・「寒窓繙史」、井口華秋「すずみの巻」、猪飼嘯谷「清水寺由来」、林文塘「その時四題」・「牝鶏」、西井敬岳「夕映の戸隠山」、渡辺公観「月明の石山」、高山春凌「孤島の夕」、玉舎春輝「花いくさ」、上田萬秋「花鳥六題」、植中直斎「宗旨建設の聖日蓮」、松村梅叟「虚栄之鴉」、小林大雲「巖窟夕照」、水田竹圃「深潭」・「間居読易」、庄田鶴友「秋三趣」、廣田百豊「農婦」・「踊る舞妓」 日本自由画壇展覧会図録			

京	都	府
<p>11・一 時習園設立(青年作家の工芸団体、会員〔陶磁〕伊東義治・浮田楽徳・池田泰山・小川文蔵・井本米泉・浅見震蔵、〔漆器〕奥村享ら、〔刺繍〕箸尾清ら)。 日出 11・20</p> <p>12・1～5 第2回赤土社同人陶芸展、府立図書館に開催(河合栄之助「無尽文字釣灯籠」・「歌絃橋畔皿」・「悟猷香炉」、河村蜻山「細口鉛釉花瓶」・「慈光花瓶」、楠部弥弍「蘭花瓶」・「遊鷺菓子器」、八木一舛「羊花瓶」、道林俊正「象香炉」・「遊楽花瓶」、荒谷芳景「苔水柱」など)。 日出 12・1</p> <p>12・5～11 未来派洋画展、高島屋に開催(ロシア未来派画家ブルリュックおよびバリモフの作品展)。 日出 12・7</p> <p>この年</p> <p>▷ 明石染人、鐘ヶ淵紡績(株)に入社、現業にも従事。 日本美術年鑑 昭35</p> <p>▷ 宮永東山、伏見稲荷山麓に築窯。 京都工芸大観</p> <p>▷ 初代諏訪蘇山、イリジューム応用の器を制作。 同上</p> <p>▷ 浜田庄司、バーナード=リーチの帰英に際し、共に行く。セント=アヴスに日本風の登窯を築き制作(約3カ年半滞在。大12春、ロンドンのパタソン画廊で初の個展を開く)。現代の眼 179</p> <p>▷ 神坂雪佳、青蓮院叢華殿の襖絵を制作。 日出 10・12</p> <p>▷ 友禅、花鳥の更紗文様やサラセン文様が流行(大紋様に目もさめるような濃厚な色彩を用いる、大9～10頃)。 友禅の変遷</p> <p>▷ 河井寛次郎、山岡千太郎の好意により、五条坂に窯を築き鐘溪窯と名づける。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>▷ 陶芸家 2代三浦竹泉没(明15生)。 京都の美術工芸100年展目録</p> <p>▷ 都路華香、朝鮮金剛山に遊ぶ。 華香墨蹤</p> <p>▷ 田中善之助、国松桂溪と共に渡欧(仏国でアンドレ=ロート、ビッシュールの教えをうける。) 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 寺松国太郎、京大総長荒木博士の肖像を制作。 中央美術 55</p>		

参	考	日	本
		<p>この年</p> <p>▷ 秋 安井曾太郎、2カ月程比叡山麓八瀬村に滞在、制作す(「薔薇」・「化粧」・「静物」を第7回二科展に出品)。</p> <p>▷ ロシア未来派画家で詩人のダビッド=ブルリュックが作品500余点たずさえ来日。未来派・立体派・表現派・形而上学派などの作品を紹介。</p>	

京	都	府
1・8 金工 龍文堂6代安之介没(享年82)。日本鑄工史		10・4 土田麦麿・小野竹橋・野長瀬晚花・黒田重太郎ら、ヨーロッパへ出発。欧州芸術巡礼紀行、比較文化4
1・14 西山翠嶂、青甲社を創設(当時の塾生山内信一・岡本蕉雨・沢宏毅・川上拙以・堂本印象・小川翠村ら18名。6月から研究会、大13・6から塾展を開催)。西山画塾青甲社		10・4 第1回日本南画院展、岡崎第1勸業館に開催(水田竹圃「泰山」・「牧羊」など)。朝日 10・3
1・16 大日本窯業協会京都支部発足式、岡崎公会堂に開催(支部長北村弥一郎)。京焼百年の歩み		10・11 日本自由画壇、小村大雲を除名。朝日 10・14
1・30 都鳥英喜、欧州から帰国(特に多数の美術書、ポスターをもち帰る)。日出 2・1、3・6		10・14~24 第8回二科展京都陳列会、岡崎第1勸業館に開催(出品数107点、特別室に京都の山田孝三郎がこの夏仏国から到来したピサロの「リンゴ畑」を展観)。美術之日本 大10・10
1・一 市立絵画専門学校一部学生、同校設備の不完全と教授法の改善のため国立移管を要求、(この問題は、2・1の教授会で入江波光が、従来の日本画教授法の旧式と写生尊重を強調し、木島桜谷がこれに反論したことから、一変して同校改革問題に発展する)。日出 2・2、5、8、15		10・14~11・4 第8回院展京都陳列会、第2勸業館に開催(富田溪仙「八瀬の春」・「小原の秋」など)。日本美術院史
3・20~5・20 京都博覧協会および京都美術協会主催で内外産業博を岡崎公園勸業館に開催。京都博覧協会史略、内外産業博報告書		10・14~11・20 第3回帝展 ⁽¹⁾ (審査外に川北霞峰「煙巖山」、小村大雲「美哉蒼窮」がある。石崎光瑠ら推薦となる。特選の福田平八郎「鯉」、堂本印象「蹴鞠図」が注目される。橋本関雪は、渡欧のため審査員を辞退する)。日本芸術院史
3・25 日本南画院設立宣言書発表会を京都ホテルに挙行(田近竹邨が中心となり結成、水田竹圃らが参加。5月、山田介堂・池田桂仙が脱退、長尾雨山・内藤湖南を顧問とする。11月、小室翠雲と計り東京の南画家の参加を求める。12月、小室・田近・池田・山田・水田を同人として再出発することとなる)。京都に於ける日本画史		10・17 友禪齋謝恩碑落成除幕式、知恩院境内に挙行。朝日 10・18、友千鳥
3・一 友禅業者ら絢染会を設立。近代友禅史		10・29~11・20 第2回日本自由画壇展、 ⁽²⁾ 岡崎第2勸業館に開催。朝日 10・20
4・21~29 霜鳥正三郎、個展を高島屋に開催(滞米中の作品、油絵45点・水彩17点)。日出 4・23		10・一 小合友之助・加藤純彦ら、商品化した図案の芸術的救済を叫んで図案創作社を設立。朝日 10・18
4・一 赤土社第3回展、東京星製(株)に開催。都市と芸術 222		11・19~22 洛陶会、仁清・乾山・木米記念の東山大茶会を洛東南禅寺から清水寺にかけて開催。松風嘉定
4・一 竹内栖鳳、中国へ渡る(7月帰国)。日本美術年鑑 昭18		11・一 府会、府立工業学校設立を可決(この秋、丹後縮緬同業組合幹部および峰山町らの有志が府立織物試験場内染織講習部の学校組織化をめざし、府に請願していたもの。翌大11・2・25設立認可)。実業教育50年史
5・一 土田麦麿、自編『麦麿画集』を山本画箋堂から出版する。土田麦麿遺作展目録		11・一 富田溪仙個展、大阪高島屋に開催(画集『京洛四季』を上梓)。富田溪仙遺作展目録
6・4~6 第22回早苗会、第2勸業館に開催(出品数140余点、川村曼舟「朝曇り」、林文塘「春光」など)。日出 6・5		11・一 美術工芸関係者らの談話会である柳桜会、第100回記念会を安井の旗亭樹之枝に開催。日出 11・7
6・一 都路華香、大阪三越に個展金剛探勝画会を開催、『金剛帖』を著す。華香墨蹟		12・1~7 第4回赤土社展、府立図書館に開催(60点陳列)。朝日 12・1
8・24 鑄工 平野英叟没(天保10京都醍ヶ井生、名吉兵衛、享年83、下寺町蓮光寺に葬る)。京都美術協会雑誌 122、京都名家墳墓録		この年
9・9 真道黎明・近藤浩一路ら日本美術院の同人となる。日本美術院史		▷ 橋本関雪、渡欧(フランス・ドイツ・イタリアなどを歴訪)。日本美術年鑑 昭19-21
9・24、25 第2回団体連合図案展、岡崎勸業館に開催(同展は図案研精会・中央図案会・彩美会・睦美会・各古屋名美会の連合)。現代の図案工芸 7:11		▷ 水田竹圃、画塾菁我会を創立。日本美術年鑑 昭34
		▷ 第10回京都四園展、東京農務省商品陳列所に開催(今回これまでの3園に時習園が参加、陶器優勢)。中央美術 71

参	考	日	本
(1)第3回帝展(京都関係のみ)		2・26、27	日本美術院、米国巡回展出品作を、日本橋倶楽部に開催(4月から10カ月間ポストンほか6市で開催)。
審査委員	(日)菊池契月・(日)西山翠嶂・(洋)太田喜二郎	3・19	ジャン=ポール=ローランス没(享年83)。
	(日)川村曼舟・(日)木島桜谷	3・28	大原孫三郎収集の現代フランス名画展、岡山県倉敷小学校に開く。マチス、マルケらの作品26点を展観。
審査員出品	西山翠嶂「錦祥女」、川村曼舟「悶え」、木島桜谷「松籟」、菊池契月「鶴」、太田喜二郎「菜種畑」「地藏祭」	4・16	金工家 岡崎雪声没(嘉永7生、享年68)。
審査外	川北霞峰「煙巖山」、小村大雲「美哉蒼窮」	5・6	日本画家 池田輝方没(明16生、享年39)。
特選受賞者	日本画	5・8~12	松岡映丘らを顧問とし、門下生穴山勝堂ら新興大和絵会を結成。第1回展を上野松坂屋に開催、昭6・2解散。
	福田平八郎「鯉」、堂本印象「蹴鞠図」	5・8~12	河井寛次郎陶磁展、東京高島屋に開催(両3年来の製作180点余を展観)。
	日本芸術院史	5・26	洋画家 本多錦吉郎没(嘉永3生、享年72)。
(2)第2回日本自由画壇展覧会		7・一	京都図案会、東京出張展を開催。
	池田桂仙「春塘帰牛」・「夏山烟雨」、井口華秋「秋立つ山荘」・「いでゆの溪」、猪飼嘯谷「出陣」、林文塘「雨後」・「洛東五題」、渡辺公観「仲秋の朝」・「秋暑」、玉舎春輝「女軍」・「男軍」・「残陽」、上田萬秋「嘉良」・「かきほの柿」、植中直斎「残象」、松村梅叟「月桃花の咲く頃」・「誰が声」、小村大雲「冥想」、水田竹圃「撫琴」・「谿居」・「秋爽」・「満城風雨」、庄田鶴友「月ヶ瀬」、廣田百豊「春宵」・「救世観音」	9・1~29	第8回院展、上野竹之台に開催、(大観「老子」、古径「罌粟」、電子「火生」など。9・9 近藤浩一路・小茂田青樹・橋本永邦・真道黎明、同人となる)。
	日本自由画壇展覧会図録	9・9~29	第8回二科展、竹之台に開催(安井曾太郎「人物」、中川一政「静物」、中川紀元「猫と女」など)。
		10・14~11・20	第3回帝展、竹之台に開催(福田平八郎「鯉」、堂本印象「蹴鞠図」、南薫造「結氷の湖水」、山本森之助「新緑の奈良」、辻永「ブルジュエの秋」、岸田劉生「童女像」、後藤良「宓妃」など)。
		10・17	帝展彫刻審査員7名辞表提出。
		10・29	帝国美術院第3回美術展覧会特選受賞者は堂本印象ほか12名。
		11・15~21	龍村平蔵織物博覧会、三越に開催、織宝会と斐成会との合同陳列で古い名物裂れの模様が多数陳列。
		12・15	曠原社結成(彫塑家建畠大夢、木彫家後藤良ら70人余)。
		12・一	平戸廉吉「日本未来派宣言運動」第1回宣言を発表、街頭で配る。
		この年	
		▷ 秋、尾形亀之助・木下秀一郎・大浦周蔵・普門暁らはブルリュックとはかつて未来派展覧会を上野で開催。	
		▷ 東京高等工芸学校創立さる。	
		▷ 高村光太郎『回想のゴッホ』を訳刊。	
		▷ 農商務省主催工芸展覧会は商工省工芸展覧会「商工展」となる。	
▷ 関西美術院改組(太田喜二郎は、沢部清五郎・黒田重太郎らと共に会頭中沢若太より任務を托され、加藤源之助・田中善之助・霜鳥正三郎・国松桂溪・川端弥之助・須田国太郎らの協力を得て難局打開を図る)。京都洋画の黎明期、日本美術工芸 305			
		▷ 関西美術会、委員制度に改革。京都洋画の黎明期	
		▷ 速水御舟、東京へうつる。現代日本美術全集 5	
		▷ 富岡鉄斎、東京府より英国皇太子へ献上の画帖に「仙洞御所之図」を描く。鉄斎	
		▷ 河井寛次郎、東京・大阪両高島屋で、宋・元・明・李朝など古陶磁の手法を逐った作品、第1回創作陶磁展を開き、絶讃をうける(以後、年次展を開催)。日本美術年鑑 昭42	
		▷ 機織家 9代河那辺喜三郎没(文久3生)。京都の美術工芸100年展目録	

京	都	府
1・1 霜鳥正三郎、文部省在外研究員として渡仏（パリではアカデミー=コロラシュでシャルル=ゲランの教えを受ける）。京都洋画の黎明期		5・3 今尾景年、滞在中の英国皇太子に「老松薔薇鳥の図」を献上。 日出 5・4
2・8 陶芸家 初代諏訪蘇山没（嘉永4・5・25金沢生、享年72、名好武、建仁寺に葬る）。京都名家墳墓録、京都芸大観		5・3 凶案家 岸光景没（天保11・9・15江戸生）。
3・11 南画家 田近竹邨没（元治1・4大分生、享年59）。書画骨董雑誌 166、美術之日本 3・20、日出 3・13		5・6 第1回京漆器蒔絵競技会褒賞授与式、市公会堂に挙行（これまでと違って美術品と実用品とを区別する）。 日出 5・7
3・24 井口華秋・大谷尊由上人合作東海道五十三次絵巻物出版記念会挙行。 日出 3・19		5・9～11 新黨会複製会、市公会堂に開催（橋本閑雪が欧州からもたらしたミケランジェロの「アダムの創造」など出品）。 日出 5・12
4・4 船川末乾、渡欧のため神戸港出帆（フランスでロートのアトリエに学び、ピカソ、ブラック、ブライマンクらと交わる）。 日出 4・1		5・13、14 秦テルヲ個展、京都商業会議所に開催（「吉原素見」14題その他35点）。 日出 5・11、21
4・7～15 第8回日本美術院試作展京都陳列会、岡崎公会堂に開催（富田溪仙「西行桜」を出品）。 日本美術院史		5・20 小野竹橋帰国。 日出 5・23
4・16 日本自由画壇の池田桂仙・玉舎春輝・林文塘・松村梅叟、中国へ渡る。 日出 4・7		5・25～29 中村大三郎第1回個展、大阪高島屋に開催（「聞香」・「舞妓」・「雪ぞら」など出品。 日出 5・25、27
4・18 中井宗太郎・入江波光・菊池契月・吹田草牧、ヨーロッパへ出発（波光・契月は、府から英・仏・伊へ派遣、大12帰国）。 日出 2・22、4・16、17、日本美術年鑑 昭22-26、31		6・11 庄田鶴友、市立絵画専門学校教授を退職する。 双葉
4・19 九名会展、福村祥雲堂主催で八坂俱樂部に開催（草白・仲静・印象・微笑・神草・大三郎・荻邨・華楊・平八郎）。 日出 4・19		6・17～19 早苗会第23回展、第2勸業館に開催（出品数143点、今回から優秀作を推薦することになる。早苗賞「初夏」古谷一晁、佳作25点をえらぶ）。 日出 6・17
4・一～6・一 日仏交換展（京都から、日本画「八瀬の春」・「大原の秋」富田溪仙、「鯉」福田平八郎、「琵琶記」伊藤小坡、「蹴鞠」堂本印象、「霖雨」石崎光瑠、「秣」西山翠嶂、「静夜聞香」中村大三郎、「花がたみ」上村松園、「しぐれ」木島桜谷、「雪松」山元春挙、「春」星野空外、「比叡山三題」川村曼舟。西洋画「地藏祭」太田喜二郎など。また美術工芸品も多数出品する）。 美術画報 43:3		7・6 川村曼舟、市立絵画専門学校教授となる。 日本美術年鑑 昭18、双葉
4・25、26 第1回京都漆工会展、真葛ヶ原菊溪俱樂部に開催（同会は芸術的製作を目的として、漆工蒔絵師および実業者23人が創立。岩村貞蔵・神阪雪佳・迎田秋悦・三木秋悦・江馬長閑・鈴木表悦・宮崎平七ら）。 日出 4・24、26		7・8 竹内栖鳳、日仏交換美術展に「蘇州の雨」を出品、仏国政府の要請により寄贈。 美術之日本 7・20、日本美術年鑑 昭18
4・30～5・7 改組第1回関西美術会展、府立図書館に開催（太田喜二郎「春」・「松の雪」、都鳥英喜「サンクール」、小川千鶴「雲が山に下りかかる」・「柳の路」、山田孝三郎「地中海岸の村」、芹川弘吉「初夏」、森脇忠「花」、その他伊藤快彦・沢部清五郎ら出品）。 日出 5・2、中央美術 81		8・一 富岡鉄斎、御物「武陵桃源図」・「瀛州神境」を描く。 鉄斎
4・一 菊池契月、大原三千院、蓮成院方丈の襖絵を完成。 日出 4・17		9・28 京都図案協会設立、創立総会を京都商業会議所に開催（発起人下村玉広・沢田宗山・落合万水・水上香邨・福岡玉麴・山鹿清華・田村春曉ら、社交団体）。 近代友禪史、日出 9・23
		9・30～10・2 第1回朱雀会展、府立図書館に開催（同会は新設の洋画家団体で、会員各自の責任ある自選により作品陳列を行なう。会員川端弥之助・三輪四郎・服部喜三・竹内政子・山田孝三郎・三井文二・芹川弘吉ら）。 日出 9・14、10・2、都市と芸術 128
		10・13～11・5 第9回院展京都陳列会、第2勸業館に開催（富田溪仙「漁火」・「岬」など）。 日本美術院史
		10・14～11・20 第4回帝展 ¹⁾ （審査員に菊池契月が退き、石崎光瑠が加わった。橋本閑雪が帰国し参加。今年の会員会議で平井樗仙が推薦となり、更に展覧会で堂本印象・福田平八郎が推薦となる。山元春挙「山上楽園」・「義士隠棲」を出品。 日本美術院史

参	考	日	本
(1)第4回帝展（京都関係のみ） 審査委員 （日）木島桜谷・（日）西山翠嶂・（日）川村曼舟・（日）石崎光瑠・（日）橋本閑雪・（洋）太田喜二郎 会員出品 山元春挙「山上楽園」・「義士隠棲」 審査員出品 木島桜谷「行路難」、石崎光瑠「白孔雀」、橋本閑雪「聖地の旅」、川村曼舟「雨二題」、太田喜二郎「田の虫送る火」・「春」 推薦出品 堂本印象「訶梨帝母」、福田平八郎「鶴」、上村松園「楊貴妃」、鹿子木孟郎「ボア・ド・ブアールニコ」・「牛」 特選受賞者 日本画 中村大三郎「灯籠のおとど」、水田硯山「秋二題」 西洋画 森脇忠「女の裸体」			日本美術院史
		1・14	日本美術院洋画部脱退の小杉未醒・足立源一郎・長谷川昇・山本鼎ら6人と梅原龍三郎、春陽会を結成。
		3・10～7・31	平和記念東京博覧会、上野に開催（藤島武二「残雪」、石井柏亭「外套を着たる夫人」、内藤伸「六道將軍」など）。
		4・15～6・15	パリの国民美術協会サロンで、日本美術展（芳崖「大鷲」、曾我直庵「柏に鷹」、栖鳳「蘇州の雨の日」など）。
		4・25	東京高等工芸学校始業式（工芸図案科・印刷工業科など）。
		5・1～31	フランス現代美術展、農商務省陳列館に開催（ボナール、ピサロ、ルドン、ユトリロ、セザンヌ、ドガなど）。
		5・7～10	河井寛次郎創作陶磁器展第2回展、高島屋に開催。
		5・24～28	第23回佳都美村工芸品展、高島屋に開催。
		7・9	文学者 森鷗外没（万延1生、享年63）。
		9・5～29	第9回二科展、竹之台に開催（安井曾太郎「椅子による女」、見島善三郎「浅き春」など）。
		9・5～29	第9回院展、上野竹之台に開催（下山観山「天心先生」、佐藤朝北「木花咲耶姫」など）。
		10・14～11・20	第4回帝展、竹之台に開催、（映丘「霞たつ春日野」、清方「春の夜のうらみ」藤田嗣治「我が画室の内にて」、南「湖畔」）。
		10・15～31	第3回未来派展を拡大した三科インデペンデント展、上野青陽楼に開催（木下秀一郎・普門曉ら）。
		10・27	帝国美術院第4回美術展覧会特選受賞者は吉田秋光ほか19名。
		10・一	浅原孟府・神原泰・古賀春江・中川紀元ら13人、前衛美術団体「アクション」結成。大12・4・2～6第1回展を三越に開く。
		この年	▷ 京都四園展、農商務省商品陳列館に開催、（遊陶園・京漆園・道楽園・時習園）。
			▷ 神原泰「アクションについて」をはじめ、現代思想の影響を受けた階級主義の上に立つ議論が現われてくる。

京	都	府
<p>10・30 田中善之助帰国（渡欧中、春陽会会員に推挙される）。 日本美術年鑑 昭22-26、中央美術 87</p> <p>10・一 日本自由画壇第3回展⁽²⁾、東京および京都に開催（11・6～12 上野自治館に開催、白倉二峰・河野秋邨らが同人となる）。 京都に於ける日本画史</p> <p>11・10 京都美術協会、東宮殿下御成婚記念事業として市に美術館建設を建議することを総会で決定。 美術之日本 大11・11、日出 11・11</p> <p>11・11～24 第9回二科展京都陳列会、第1勸業館に開催。</p> <p>11・18～24 第2回日本南画院展、第1勸業館に開催（この年より東京においても開催される）。 日出 11・20</p> <p>11・一 稲垣稔次郎、松坂屋図案部に勤務し高級衣装のデッサンに従事。 日本美術年鑑 昭39、稲垣稔次郎作品集</p> <p>12・8 橋本関雪、ドイツの少女ウフリ、エメリスを伴い帰国。 美術画報 43:3</p> <p>12・12 石崎光瑠、欧州に旅行（大12帰国）。 日本美術年鑑 昭22-26、中央美術 88</p> <p>この年</p> <p>▷ 川端弥之助、三輪四郎とともに渡欧（パリでゲランに師事、三輪は病を得て翌12・7 帰国）。 日出 大13・10・23</p> <p>▷ 加藤英舟、皇后陛下関西行啓の際、川崎家からの献上画を揮毫。 日本美術年鑑 昭15</p> <p>▷ 小野竹橋、雅号を竹喬と改める。 小野竹喬作品集</p> <p>▷ 小林和作、林重義とともに上京（のち春陽会・独立美術協会で活躍）。 三彩 254</p> <p>▷ 日仏交換美術展に「琵琶歌」を出品した伊藤小坡、その作品を寄贈することを承諾する。 美術之日本 7・20</p> <p>▷ 日仏交換美術展の結果、京都から竹内栖鳳がサロン会員に、山元春挙・清水六兵衛・清風与平・川島甚兵衛・龍村平蔵らが準会員に選ばれる。 美術之日本 大11・8</p> <p>▷ 山元春挙、摂政官御用「義士隠棲」を揮毫。 都市と芸術 240</p> <p>▷ 富田溪仙、仏国大使ポール＝クロードと相識り、詩画集「皇城十二景」の合作なる。 富田溪仙遺作展目録</p> <p>▷ 村上華岳、パリ日本美術展に「菩薩（CINTAMANICAKRA）」を出品する。 華岳画集、日本美術年鑑 昭15</p> <p>▷ 六趣会設立（漆芸研究・作品発表を目的とする）。 日本美術年鑑 1929</p>		<p>▷ 市立工業学校教諭亀井光三郎、改良流し染を發明（これは千総がさらに研究を重ね、大15ごろマドレー染として売り出される）。 近代友禅史</p>

参	考	日	本
<p>(2)第3回日本自由画壇展覧会 池田桂仙「林泉書屋」、井口華秋「鯛」・「淀川四題」、猪飼嘯谷「加茂行幸」、林文塘「薄景」・「南支の印象」、渡辺公観「南国の巻」・「桃太郎」、玉舎春暉「水市」・「田里」・「夕暉」・「山路」、上田萬秋「溪ゆく水」・「鐘冴る夜」・「岫を出る雲」・「月楼に落つ」・「麗春」・「金秋」、植中直斎「龍女出現」、松村梅叟「楽五題」、水田竹圃「長江帆影」・「銭塘雨霽」・「黄河南岸」・「姑蘇春夕」、庄田鶴友「夏の海辺」 日本自由画壇展覧会図録</p>			

京	都	府
1・9～11 第11回京都四園工芸展、東京農務省商品陳列館に開催（時習園の全盛）。 図案と工芸 大12・7		出品。 日出 6・10、13
1・18～23 京都新進作家展、東京文房堂に開催。 美術之日本 大12・2・20		6・21～24 金赤会展、大丸に開催（柴原魏象・榊原苔山・山内信一らが組織）。 日出 6・20
3・一 沢村専太郎、在外研究のため支那・仏国などへ出発（大15・1・9 帰国）。哲学研究 171		6・一 日本自由画壇、猪飼嘯谷の脱退承認。 京都に於ける日本画史
3・一 日本自由画壇、水田竹圃の脱退を承認（27日渡支）。 日出 4・2、京都に於ける日本画史		7・一 竹内栖鳳、聖徳記念絵画館壁画調製委員となる。 日本美術年鑑 昭18
3・一 土田麦麩、ヨーロッパから単独帰国する。 麦麩遺作集		7・一 須田国太郎、帰国。 須田国太郎
3・一 市立美術工芸学校、校則を改正し予科を廃し修業年限を5カ年とする。実業教育50年史		10・1 霜島正三郎、欧州留学から帰国。 日出 10・2
4・4 入江波光・菊池契月・中井宗太郎ら欧州から帰る。 双葉		10・3 岸田劉生、震災をのがれ、鎌倉鶴沼から南禅寺草川町41に來住、約3年間在洛（11月「美術品の恒久性と美術の真価について」と題し講演。この京都時代、お茶屋遊びに、連日酒びたりの生活を送る一方、初期肉筆浮世絵の蒐集につとめる）。 岸田劉生
4・16～14 秦テルヲ個展、府立図書館に開催（このころ城南加茂村に居住）。 日出 4・11		10・31～11・13 関東大震災のため東京で中止された第10回二科展、勸業館に開催（出品総数137点、特別陳列仏国現代作家作32点。黒田重太郎、同展に「水浴の女」・「修道僧の像」など多数の滞欧作を陳列、これにより二科会会員に推挙される。他に津田青楓「出雲崎の女」、石井柏亭「ヴェスヴィオ」、安井曾太郎・正宗得三郎ら）。 日出 10・31、11・1
4・21～29 第3回朱雀会展、府立図書館に開催（同会は1年3回開催、沈滞気味の洋画壇に新鮮な刺激となる）。 日出 4・22		10・一 故3代川島甚兵衛作「春郊鷹狩之図」壁掛ようやく完成、宮内省に上納。 西陣史
4・22 吉田忠三郎収蔵現代著名作家展、京都美術倶楽部に開催（富岡鉄斎・今尾景年・竹内栖鳳・山元春挙・富田溪仙など出陳）。 技芸倶楽部 1・2		11・20～12・15 大阪毎日新聞社主催・日本美術展、第2勸業館に開催（震災のため中止された帝展に変わるもので、特選にかわり日展賞を授与する）。 大阪毎日 11・19～
4・一 日本自由画壇後援会主催試作展、大阪三越に開催（入見少華・田中紅園・吉田寛・佐々木千早など入選、以後数回開催）。 京都に於ける日本画史		11・25 京大の美学会復活、第1回例会を学生集会所に開催（昭23・8・16 第115回を開催）。 美学会記録
4・一 黒田重太郎帰国。 京都洋画の黎明期		12・2～4 現代大家草稿スケッチ展、『都市と芸術』社主催で岡崎公会堂に開催。 都市と芸術 121
4・一 第9回日本美術院試作展、第1勸業館に開催。 日本美術院史		この年
5・1 上田麦麩、欧州巡遊から帰国。 土田麦麩展目録、比較文化 4		▷ 春、4代中村東流、中国から帰国。 京都工芸大観
5・11～20 関西美術会展、府立図書館に開催。 日出 5・11		▷ 土田麦麩、画塾（山南会）を設立。 土田麦麩展目録
5・29 小早川秋声、帰国。 日出 5・12		▷ 津田青楓、東京から京都に移り、家塾を設けて後進を指導。 京都洋画の黎明期
5・一 田中善之助、春陽会第1回展に滞欧作を発表。 日本美術年鑑 昭22-26		▷ 安井曾太郎、震災後しばらく京都に滞在。 日本美術年鑑 昭31
6・1～3 光胎社展（南画・日本画・油絵）、府立図書館に開催。 日出 6・2		▷ 橋本関雪、竹杖会を脱退する。 大毎美術 3:2
6・2～3 11団体連合図案展、第1勸業館に開催（研精会・中央図案会・彩美会・睦美会・名美会・白星会・自由図案会・美都里会・旭技会・表現院・無名会）。 日出 5・11		
6・9～11 第24回早苗会展、第2勸業館に開催（出品数143点、入選39点、早苗賞は武田鼓葉「椿」、古谷一屍「無我」、八百谷其雲「青梅」が受賞。案本一洋「木下闇」、川村曼舟「波」など		

参	考	日	本
(1)大阪毎日新聞社主催日本美術展(京都関係のみ) 審査員 竹内栖鳳・橋本関雪・川村曼舟・都路華香・土田麦麩・菊池契月・榊原紫峰・富田溪仙・西山翠嶂・太田喜二郎ら 審査員・賛助者出品 「黄河河畔」竹内栖鳳、「寢覚の床」川村曼舟、「舞妓」・「二人の巴里女」土田麦麩、「水汲の女」菊池契月、「鶏頭と猫」など4点榊原紫峰、「木槿の女」西山翠嶂、「維摩」堂本印象、「仏画」村上華岳、「北国の田舎道」小野竹喬、「風景」入江波光、「鯨」福田平八郎 受賞者 (日本画) 銀牌「風景」伊藤草白、「花鳥」金島桂華、「花畑」宇田荻邨、「漁村」不染鉄二、「菊」寺田蘆秋、「動物園」塩見青嵐 大阪毎日 11・14～		2・10 雑誌『アトリエ』創刊。 4・2～7 現代の図案工芸社主催、現代工芸作品展覧会、三越に開催。 5・5～27 春陽会第1回展、上野竹之台に開催、公開審査を行なう（小杉未醒「壁画稿（泉）」、梅原龍三郎「裸婦」・「カンス港」、万鉄五郎「冬の目」など）。 6・22 日本画家 松本楓湖没（天保11生、享年84）。 7・28～8・3 村山知義・柳瀬正夢ら「マヴェ」を結成、第1回展を浅草伝法院に開催。大13・7『マヴェ』創刊、～大14・8＝7号）。 7・一 第2回大東墨書会開催。 9・1 関東大震災のため第10回院展は中止。 9・1 帝展は中止。10・30～11・25 大阪商品陳列館に開催（大観「生々流転」、岳陵「昏光経」、近藤浩一路「鶏飼六題」など）。 9・1 第10回二科展は招待日に震災のため中止、京都・大阪・福岡で開く（山下新太郎「金閣寺林泉」、小出栖重「帽子のある静物」、黒田重太郎「一修道僧の像」、藤川勇造「マドモアゼルS」、創立十周年を記念してピカソ、ブラック、マチスらフランス現代画家の作品40余点を特陳）。 9・一 関東大震災のため東京での秋季美術展覧会はほとんど中止される。 12・一 『国民美術』創刊（『美術月報』を改題、国民美術協会機関誌、～大15・5）。 この年 ▷ 河井寛次郎陶器展覧会、東京高島屋に開催。 ▷ 牙彫師 旭玉山没（天保13江戸浅草生、名富三郎、享年82）。 ▷ ブラジル独立百年祭記念博開催（京都から七宝陶磁器刺繍銅器漆器など出品、授賞される）。	
▷ 河井寛次郎、黒板勝美博士の知遇を得る。また大毎京都支局長、岩井武俊を識る（創作についての反省始まる）。 日本美術年鑑 昭42 ▷ 蒔絵師 2代浮田楽徳没（享年61、その子3代を襲名）。 京都工芸大観 ▷ 猪飼嘯谷塾第1回青竹会展開催。 西山画塾青甲社 ▷ 日本自由画壇、本年は展覧会を中止、翌13試作展を開催。 都市と芸術 大12・11 ▷ 村上華岳、京都を去り芦屋へ移る。 華岳画集、日本美術年鑑 昭15 ▷ 村上華岳、大阪高島屋に個展を開催し『華岳画集』を同店から出版する。 華岳画集、日本美術年鑑 昭15 ▷ 山元春挙、東宮御成婚式京都府献上御屏風「祥瑞図」を揮毫。 都市と芸術 240			

大13(1924)年

京	都	府
<p>2・4 陶器業 2代松風嘉定没。松風嘉定 2・一 図案研精会解散。近代友禪史 3・一 岸田劉生、第2回春陽会展に「童女像」 ・「童女舞姿」など7点を出品（春陽会会員とな る。大14退会）。岸田劉生 3・一 佳都美村、組織を改善し京都美術工芸 会と改称（会長藤代禎輔、総務神阪雪佳、会員伊 東陶山・岩村貞蔵・岩村光貞・石本暁海・丹羽冬 橘・河村蜻山・龍村平蔵・山田楽全・山鹿清華・ 古市卯之助・迎田秋悦・江馬長閑・宮永東山・三 木表悦・清水六兵衛・鈴木表朔ら、出品公募制度 を設ける）。都市と芸術 205、大毎美術 3:5、 日本美術年鑑 1929 3・一 浜田庄司、イギリスから仏・伊・エジ プトを経て帰国（5月まで京都の河井寛次郎宅に 滞在、のち栃木県益子に入って陶器製作に没頭）。 現代の眼 179 4・2～10 第2回春陽会展、京都商業会議所 に開催。日出 4:3 4・20 服部春陽個人展、円山公園真葛ヶ原菊 溪倶楽部に開催（京都へ帰住することになった記 念のため）。大毎美術 3:5 4・一 玉舎春輝、中国へ渡る（6月帰国）。 大毎美術 3:5、7 4・一 柳宗悦、東京から上京区吉田下大路に 移住（6月、木喰上人研究のため甲州へ出発）。 民芸40年 5・3～4 猪飼囃谷熟青竹会展、市公会堂に 開催（囃谷「山田長政」など出品）。 都市と芸術 127 5・8～10 小早川秋声個展、大阪三越に開催 （3カ年の渡欧中の成果を発表、出品数59点）。 同上 5・10～12 浮世絵展、府立図書館に開催（出 品総数300点、浮世絵・長崎絵・初期洋風絵画を 展示）。日出 5:13 5・11～18 関西美術会展、京都商業会議所に 開催（委員は大田喜二郎・沢部清五郎・田中善之 助・森脇忠・黒田重太郎・加藤源之助・霜鳥正三 郎・国松桂溪、出品総数350点、鑑査・無鑑査88 点、審査済みの美術工芸品47点を陳列、梅原龍三 郎「臥裸婦」、安井曾太郎「腰かけの女」、上野為 二「夜の静物」、三井文二「縫物する女」、太田喜 二郎「橋」、都鳥英喜「盛夏」、霜鳥正三郎「スイ スの女」、沢部清五郎「女」、堂本五三郎「アシリ ア葡萄香合」など多様な流派の作品を展示する。 他に田中善之助・森脇忠・小林雨郊・小合友之助 ら）。日出 5:14、19、大毎美術 3:7</p>	<p>5・18 為恭・蓮月尼遺墨展、香雪殿および夏 葛庵に開催。大毎美術 3:7 5・23～29 京都名家近作展、京都の春芳堂・ 東京の嘉祥堂・安川大成堂共催で、東京松屋に開 催。美術年鑑 大14 5・31 竹内栖鳳ら市立絵画専門学校教授を辞 任(移転にからむ紛糾により、5・10 荒木矩教授 退職、5・31 竹西栖鳳・山元春挙・藤代禎輔校 長ら退職、これにともない、6・20 都路華香・ 西村五雲が教授に、7・11 福田平八郎が助教授 となる。同校の編成は ▷予科1年 川村曼舟・ 察本一洋 ▷予科2年 木島桜谷・徳田隣斎 ▷ 本科1年 菊池契月・入江波光 ▷本科2年 西 山翠嶂・福田平八郎 ▷本科3年 都路華香・西 村五雲となる。6・30 察本一洋・中村大三郎が 市立美術工芸学校の教諭となる。7・11 合田一 峰が退職)。大毎美術 13:8、双葉 6・4 京都美術工芸会、試作展を南禅寺福垣 和庵庵に開催。大毎美術 3:7 6・6～10 第4回朱雀会展、府立図書館に開 催。都市と芸術 大13:6 6・14～18 第25回早苗会展、岡崎第二勸業館 に開催（山元春挙「長巻写生帖」を出品、本年か ら大阪でも開催）。都市と芸術 128 6・21～22 第1回青甲社展、岡崎勸業館に開 催（一切の鑑査なし、西山翠嶂「暹日」、堂本印 象「坂」など出品）。 西山画塾青甲社、都市と芸術 128 8・15 鹿子木孟郎、東京美術学校校長正木直彦 から、明治神宮奉賛会が満鉄会社に寄贈する「日 露戦役奉天戦図」の揮毫を依頼され、直ちに満州 に渡る。鹿子木孟郎小伝 8・17 九名会展、八坂倶楽部に開催（福田平 八郎・堂本印象・中村大三郎・宇田荻村・山口華 楊・岡本神草・伊藤草白・登内微笑・山本紅雲ら の新進画家の団体祥雲堂が主催、震災で一時中止 となっていたものを再開）。 大毎美術 3:9、都市と芸術 134 9・7～8 近藤浩一路個展、千本出世美術俱 楽部に開催（「鶉飼六題」・「京洛百題」など）。 都市と芸術 132、大毎美術 3:10 9・17 南画家 山田介堂没（明2福井県生、 享年56）。日出 9:18 9・中 洋画家 三輪四郎没（但馬城崎生、享 年27、10・22～26遺作展が府立図書館で開かれる。 滞欧作など35点を陳列）。日出 10:23 9・一 パリ万国工芸博出品に対し、時習園は 疎外され、他の美術工芸諸団体と対立する。 日出 9:5</p>	

参	考	日	本
		<p>3・一 齋藤与里・牧野虎雄・熊岡美彦ら槐樹 社を設立、6月第1回展を開催。 5・12 矢沢貞則(弦月)・荒木悌二郎・藤島武 二・朝倉文夫・小室貞次郎(翠雲)ほか68名、美術 展覧会委員となる。 5・23～29 京都名家近作展覧会、日本橋松屋に 開催（京都の春芳堂、東京の嘉祥堂と安川大成堂 の主催、工芸品も陳列）。 5・31 フランス現代美術展に出品のロダンの 「接吻」ほか6点に撤去命令がだされる。 6・2～29 フランス現代美術展、上野公園に 開催（主催、国民美術協会）。 6・16 帝国美術院展覧会規程中、鑑査に関し ては美術展覧会委員が当ることになり関係条項を 改正。 6・一 大阪美術学校創立。 7・15 洋画家 黒田清輝没（慶応2生、享年 59、11・5～11・15遺作展）。 9・2～29 第11回院展（川端電子「竜安泉石、 小川芋銭「夕風」、速水御舟「暁靄」）。 9・2～29 第11回二科展（小出橋重「帽子を 冠れる肖像」、横山潤之助「ギターを持つ男」、藤 川勇造「ブロンド」）。 10・9 帝国美術院議事規則並びに帝国美術院 授賞者規則を制定す。 10・15～11・20 第5回帝展、竹之台に開催、 （靉音「定朝神技」、契月「立女」、藤島武二「東 洋振り」・「アマゾンヌ」、中村彝「老母像」、牧野 虎雄「風揚げ」、藤田嗣治「静物」など）。 10・一 三科造型美術協会結成（アクション、 未来派、マヴォ、DSDなどが合同、大14・5第1 回展を開催）。 10・一 日仏芸術社が創立。 11・1～13 淡交会第1回展、三越に開催（玉 堂、靉音、栖鳳、春挙、大観、観山、栖鳳「斑 猫」、春挙「捨捨拾髓」、大観「杏」など）。 11・30～12・13 国画創作協会第4回展、竹之 台に開催（麦畑「舞妓林泉」、紫峰「雪柳白鷺図」 など）。 12・24 洋画家 中村彝没（明20生、享年38、 翌年3月遺作展を九段画廊に開催）。</p>	

京	都	府
<p>10・5 日本画家 今尾景年没(弘化2・8・12 京都生、享年80)。 書画骨董雑誌 197、都市と芸術 133、日出 10・7</p> <p>10・10～25 第11回院展京都陳列会、第2勸業館に開催(近藤浩一路「京洛十題」など陳列)。 日本美術院史</p> <p>10・15～20 第1回京都美術工芸会展、第2勸業館に開催(市主催)。審査長 武田五一、出品人数222名、出品数1,529点。1等〔陶磁器〕中村東洸・松崎木三園、〔漆器〕大橋庄兵衛、〔金属品〕金谷五郎三郎・黒井光珉ら)。日出 10・15、22</p> <p>10・15～11・20 第5回帝展¹⁾(美術展覧会委員菊池契月・木島桜谷・西山翠嶂・川村曼舟・都路華香・川北霞峰・西村五雲・石崎光瑠・橋本閑雪・堂本印象・上村松園・福田平八郎・小村大雲・平井煤仙ら、土田麦僊はすでに推薦となっているが、独自の展覧会を運営しているので、推薦の資格のままのこされる。この年は特選制度を廃止する。11・27～12・11 京都陳列会を岡崎勸業館に開催)。 日本芸術院史</p> <p>10・30～11・1 第11回二科展京都陳列会、第2勸業館に開催(出品数181点、構成派主流、黒田重太郎「マドレーヌ・ルパンチ」・「冬林」・「母子」・「窓際の女」、小出橋重「帽子をかぶる肖像」、他に古賀春江・石井柏亭・安井曾太郎ら)。 日出 11・1</p> <p>11・1～13 第3回日本南画院展、第2勸業館に開催(水田竹圃の三幅対など出品)。 都市と芸術 133、日出 11・1</p> <p>11・13～21 第4回日本自由画壇展、市公会堂に開催。 都市と芸術 133、日出 11・13、14</p> <p>11・14～18 第5回朱雀会洋画展。日出 11・17</p> <p>11・19 竹内栖鳳、仏国政府からシュバリエ・ド・ラ・レジオンドノールを贈られる。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>11・1 第4回国画創作協会展²⁾、東京上野竹之台陳列館に開催(出品数60点、うち会員12、会友13、入選35。橋牛賞佐原修一郎「老母の像」、出品会友伊藤草白・岡村宇太郎・甲斐莊楠音・粥川仲二・榊原始更・吹田草牧・杉田勇次郎、大14・1 京都展を岡崎第2勸業館に開催)。 中央美術 11:1</p> <p>11・1 竹内栖鳳、三越本店第1回淡交会展に「斑猫」を出品。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>11・1 富田溪仙・西村五雲合同展、土井選美堂に開催。 富田溪仙遺作展目録</p> <p>12・31 南画家 富岡鉄斎没(天保7・2・19 京都生、享年89、寺町三条大雲院に葬る)。 日本美術年鑑 1925、鉄斎</p> <p>12・1 生作社展、府立図書館に開催(若い洋画家の団体)。 都市と芸術 大14・1</p>	<p>信助・河合卯之助・近藤悠三、漆芸徳力彦之助・平館齋、色染塚本繁らにより、第1回展を開催)。 日本美術年鑑 1929、日出 大15・10・13</p> <p>▷ 近藤浩一路、京都に移住、また「京洛十景」完成(昭12まで在住)。 大正文化、日本美術年鑑 昭38</p> <p>▷ 山田介堂、日本南画院を脱退。 都市と芸術 131</p> <p>▷ 富田溪仙、郷里博多の氏神榊田神社に「麒麟鳳凰屏風」を製作献納する。 富田溪仙遺作展目録</p> <p>▷ 山元春挙、久邇宮王子殿下御結婚御用「蓬萊山図」を揮毫。 都市と芸術 240</p> <p>▷ 小早川秋声、東本願寺の依囑により「薰風」六曲屏風を完成。 都市と芸術 128</p> <p>▷ 橋本閑雪、『南画への道程』を中央美術社から出版。 大毎美術 3:6</p> <p>▷ 人見少華、南画院の同人となり、日本自由画壇の壇友となる。 大毎美術 3:9</p> <p>▷ 金工 2代高木治兵衛没(文久2・1生、名秀治郎、号鉄軒、享年64)。 日本鑄工史</p> <p>▷ 国松桂溪渡仏。 日本美術年鑑 1929</p> <p>▷ 4代清風与平、摂政宮殿下御結婚奉祝に際し、文武宮の献上品として黄均蚕香炉の製作を依頼される)。 京都工芸大観</p> <p>▷ 竹内栖鳳、摂政宮御結婚京都府献上屏風、「和暖」、東宮御所献上画「春の海」を揮毫。 日本美術年鑑 昭18</p> <p>▷ 今井八方堂、菊池契月近作数十点を美術倶楽部に陳列(伏原春芳堂も自宅に陳列)。 都市と芸術 130</p> <p>▷ 土井選美堂、竹内栖鳳近作数十点を陳列、「(柳に白鷺)」「紙治」など展示)。 同上</p> <p>▷ 岡墨光堂、富岡鉄斎近作十数点を陳列)。 同上</p> <p>▷ 富岡鉄斎、名古屋松坂屋で個展を開催(これが最後の展覧会となる)。 鉄斎</p> <p>▷ 漆芸研究および発表を目的として新たに五匠園設立(井田宣秋・奥村霞城・津田翠光・迎田秋悦・堂本五三郎ら、昭4解散)。 日本美術年鑑 1929、京都工芸大観</p> <p>▷ 芸術研究団体青冥社設立(市立絵画専門学校・市立美術工芸学校両校出身の教職にある人達からなる。人見少華・川本参江・合田一峰・六月文一・谷口鉄造ら)。 大毎美術 3:11</p> <p>▷ 行き詰まった京染の革新をめざして、真美会が設立される(この年2回展覧会を開催、以後も毎年開く)。 京友禅、日出 9・22</p> <p>▷ 河井寛次郎、陶器の所産心と題し、恩賜京都博物館で講演。 日本美術年鑑 昭42</p> <p>▷ 関西美術会に工芸部が新設される(河井寛次郎、富本憲吉ら活躍)。 京都洋画の黎明期</p> <p>▷ 齋藤素巖作、レリーフのブロンズ作品「雲」が京大時計台正面玄関にはめこまれる。 京都の明治文化財</p>	
<p>この年</p> <p>▷ 春、美術工芸団体華鬘社設立(陶芸伊藤</p>	<p>この年</p> <p>▷ 清風与平作陶展覧会。東京高島屋に開催、</p> <p>▷ 日本自由画壇第4回展覧会。</p> <p>▷ ブルトンの『シュールレアリスム宣言』刊行される。</p> <p>▷ 添田達嶺著『日本画壇争闘史』刊行。</p>	

参	考	日	本
(1)第5回帝国美術院展覧会委員 (京都関係のみ)	(日)菊池契月、(日)都路華香、(日)橋本閑雪、(洋)太田喜二郎、(日)木島桜谷、(日)川北霞峰、(日)上村松園、(洋)鹿子木孟郎、(日)小村大雲、(日)西山翠嶂、(日)西村五雲、(洋)満谷国四郎、(日)平井煤仙、(日)川村曼舟、(日)石崎光瑠、(日)堂本印象、(日)福田平八郎		
会員出品	山元春挙「天馬奮迅」		
委員出品	平井煤仙「山陰の水郷」、菊池契月「立女」、堂本印象「故父」・「乳の願い」、福田平八郎「牡丹」、小村大雲「往時追懐」、木島桜谷「たけがり」、川村曼舟「薄れ日」、鹿子木孟郎「牧童」・「加茂ノ森」、太田喜二郎「老稚の花」・「洛北の農家」 日本芸術院史		
(2)第4回国画創作協会展	入江波光「虹」、小野竹喬「春耕」、榊原紫峰「雪柳白露の図」、土田麦僊「舞妓林泉図」・「鮭之図」・「蔬菜」・「大原女(画稿)」、野長瀬晩花「スペインの田舎の子供」、村上華岳「説法の図」・「八重桜」・「瓜茄残暑」・「菩薩」、伊藤草白「能登風景」・「枇杷」、伊藤柏台「冬の日」、池田三千郎「街道小景」、石川利治「老父」・「顔」、石橋謙吾「北海に浴う或村」、井上永悠「静物」、上田真吾「田中村(素描)」・「道(素描)」、於川龍人「冬」、小川栄太郎「能登小木風景」、小野朱竹「瀬田(素描)」・「里庄(素描)」、大路未黎「素描」、岡村宇太郎「漁夫」・「日没頭」、暴風雨の後)、甲斐莊楠音「舞ふ半裸の女」、榎野南陽「島の海」、要樹平「兵舎附近」、粥川仲二「妖影」、川上澄生「春の伏兵(素描)」、小松均「秋の野に死骸を送る村人達」、佐藤久吉「素描」、佐原修一郎「老婆の像」、吹田草牧「郊外秋景」、杉田勇次郎「顔(素描)」・「人形」・「静物」・「鱸韻烟江」、高山三路「素描」・「風景」、坪井泰治「静物」・「茂林」、戸田北達「ダリア」、半田鶴一「漁村暮趣」、日高竹三郎「稲刈」、久川大三「風景」、平川清蔵「初夏池畔(素描)」、平塚運一「駒沢村風景(素描)」、福田豊四郎「東福寺風景」、藤村良一「風景」、丸岡比呂史「村の池」、森谷南人子「秋の日」、山下摩耶「習」。 第4回同展図録		

京 都 府	
1・8 竹杖会、竹内栖鳳仏国勲章拝受祝賀会 開催。 日本美術年鑑 昭18	5・10 大雅 150年祭展観、京都菊溪倶楽部と 中村楼に開催。 日本美術年鑑 1926
2・一 三条会設立(津田青楓・近藤浩一路・ 九里道柳子(四郎)の3人、「洋画的教養から学 び得た大道を、日本画の材料を生かして表現する ことより生まれる」未来の日本画研究をめざす)。 大毎美術 4:2、日出 4:24	5・15~20 関西美術会展、京都商業会議所に 開催(委員:太田喜二郎・森脇忠・須田国太郎・ 沢部清五郎・加藤源之助・富本憲吉・田中善之助 ・霜鳥正三郎・新井謹也・黒田重太郎・国松桂溪 ・河井寛次郎、出品総数280点、うち入選62点、 無鑑査41点、工芸品は約100点の内から8点を選 ぶ。名誉会員:伊藤快彦・里見勝蔵・寺松国太郎 ・都鳥英喜・安井曾太郎らも出品、6・20~25 大 阪白木屋に開催)。日出 5:16、大毎美術 4:7
2・一 冬心会設立(北上聖牛・柴原魏象・小 早川秋声・不築鉄二・山元春汀・梅崎朱雀・梅村 素溪・金島桂華・荒井草雨・塩見青嵐・梅景香雪 ・八田高容ら12名の団体)。大毎美術 4:2	5・19 中村大三郎、市立絵画専門学校助教 となる。 双葉
3・3 府商工課、主に隠れた工芸作家と作品 の紹介を目的として第1回作品展を市公会堂に開 催(同時に選匠会の発会式を挙行)。日出 1:29	5・24、25 岡本宇太郎・多田敬一・中川伊三 郎・藤村良一・佐原修一郎・久川太三・杉田勇次 郎の第1回展、丸太町東詰愛国婦人会館に開催。 大毎美術 4:7
3・4 市立絵画専門学校、別科生を選科生に、 研究科2カ年を5カ年に改む。 双葉	5・25 明治神宮壁画「奉天入城図」作製のた め渡満中の鹿子木孟郎帰国。日出 5:28
3・7 九名会展、祥雲堂主催で八坂倶楽部に 開催。 大毎美術 4:4	5・30~6・7 中央美術社主催仏国現代大家 新作展、府立図書館に開催。大毎美術 4:6
3・15 生作社絵画研究会、葎屋町下立売上ル 真敬寺に開催(6・6にも開く)。 大毎美術 4:5、7	5・31~6・2 第2回青甲社展、岡崎商品陳 列所に開催(西山翠嶂「竹生島」、堂本印象「寒 山拾得」、山内信一「閑庭」、川上拙以「袴」、小 村翠村「姉妹」、上村松堂「水禽」、森守明「椅子 にすわる子供」、福田恵一「鬮」、福田翠光「萌芽 栄光」、三谷十糸子「女」)。 都市と芸術 141、西山画塾 青甲社
3・20~5・25 京都博覧協会、国産品愛用の 目的で優良国産博を岡崎市勸業館に開催。久しぶ りに美術工芸部門専門の審査が行なわれる。 妙技賞受賞者 清風与平・清水六兵衛・諏訪蘇 山・伊東陶山・宮永東山・高橋清山・横山瑞祥・ 川島織物所・山鹿清華・龍村平蔵ら。 京都博覧協会史略	5・一 石崎光瑤、市立絵画専門学校教授とな り、宇田荻郎は市立美術工芸学校教諭となる。 大毎美術 4:6
3・25 都路華香、市立絵画専門学校長心得兼 美術工芸学校長心得となる。 華香墨蹟	5・一 日本自由画壇第3回試作展、大阪およ び京都に開催(円尾華甫ら21名入選)。 京都に於ける日本画史
3・一 須田国太郎、和歌山高等商業学校講師 となり美術工芸史を担当。 須田国太郎	5・一 植田寿蔵、在外研究のため出発(昭2 ・11帰国、九州帝国大教授就任)。京都大学70年史
4・1 市立第二工業学校、五辻浄福寺に開校 (市立工業学校から分離独立、木材工芸科・金属 工芸科・玩具科の3科を本校に、陶磁器科を分教 場に設置、これにより従来の陶磁器講習所は廃止 される。校長岩森弥助)。実業教育50年史	6・7 京都画壇の明治30年代にその中心生命 となった後素協会の創立30年記念展が催され、そ の物故会員の追悼会を建仁寺方丈に挙行。 大毎美術 4:7
4・9 木島桜谷、市立絵画専門学校教授を退 職。 双葉	6・9 ワグネル銅像の除幕式、府立図書館北 側に挙行。日出 6:5
4・20~5・5 松方幸次郎所蔵の浮世絵版画 200点を恩賜京都博物館に特陳。 日本美術年鑑 1926	6・12~15 吉川観方・三木翠山創作版画展を 大丸に開催。大毎美術 4:7
4・28~5・2 柳宗悦、木喰上人木彫遺作展 を京大仏教青年会館に開催(代表作60余点を展示)。 日出 4:30	6・20~22 第1回菊池契月塾展、第2勸業館 に開催(例年菊池契月・竹内栖鳳・山元春挙・都 路華香らを招いての月次会を発展し公開したもの。 会の宣言書には「芸術上のむつかしい主義に因づ く運動でもなく派と称するものの主張でもありま
4・一 幸野樺嶺30年忌に当り、凌雪園同人の 手により『東行写真』を復刊。 樺嶺遺墨	
5・1~10 国画創作協会第1回春季展 ⁽⁹⁾ 、京 都商業会議所に開催(出品点数100点、うち会員8、 会友19、他73、この内版画4点を含む)。 大毎美術 4:6、日出 4:30	

参 考	日 本
(1)第6回帝展(京都関係のみ) 審査員 (日)木島桜谷、(日)西山翠嶂、(洋)鹿子木孟郎、 (日)川村曼舟、(日)西村五雲 帝国美術院美術展覧会委員 中村大三郎、水田竹圃 会員出品 竹内栖鳳「鯖」、山元春挙「火口の水」 審査員出品 橋本閑雪「相牛・摘爪図」、川村曼舟「斜陽」、 木島桜谷「婦女三題」、鹿子木孟郎「徒手空拳」、 福田平八郎「閑庭待春」、堂本印象「華嚴」、川北 霞峰「山寺の月」、平井煤仙「山雨」 特選受賞者 第1部 絵 画 登内微笑「観喜光」、小川翠村「廢園晚秋」、金 島桂華「芥子」、宇田荻郎「山村」、福田恵一「豊 公」、小林観爾「芍薬」、水田硯山「雲散、水肥」 日本芸術院史	3・6~29 春陽会 第3回展、竹之台に開催 (万鉄五郎「羅布かつぐ人」・「水衣の人」、岸田 劉生「少年肖像」、梅原龍三郎「榛名湖」、小杉未 醒「泉」)。 3・25 彫刻家 米原雲海没(明2生、享年57)。 4・15~10・15 政府、パリ現代裝飾美術工芸 万国博覧会 ⁽²⁾ に参加、638点出品。 5・一 板谷波山・植松包美・香取秀真ら工芸 済々会結成、11月第1回展。 5・一 第1回三科展、上野松坂屋に開催(ダ ダイズムと構成主義が強い)。 7・13 勅令253号をもって帝国美術院規定を 改正。 7・一 国画創作協会第2部洋画設置、梅原龍 三郎・川島理一郎会員となる。 8・一 前田寛治帰国。 9・2~23 日仏芸術社主催、第3回フランス 美術展(モロー、ルノワール、モデリアニ、ロ ダン、プーセルなど)。東京・大阪・別府・福 岡の各地で開催。 9・2~29 第12回院展(大観「山四趣」、靱 彦「日食」、竜子「印度更紗」)。 9・2~29 第12回二科展(安井曾太郎「柿実 る頃」、曾宮一念「冬日」、特別出品・坂本繁二郎 「帽子を持てる女」・「老婆」など)。 10・16~11・20 第6回帝展(栖鳳「鯖」、清 方「朝涼」、満谷国四郎「早春」、前田寛二「J.C. 嬢」など、第1回院賞、堂本印象「華嚴」、熊岡 美彦「緑衣」)。 11・2 帝国美術院第6回美術展覧会特選受賞 者は服部有恒ほか22名。 11・14~16 初代豊国100年記念浮世絵展、東 京美術学校に開催。 11・一 三科会解散し、神原泰・浅野孟府ら造 型結成、大15:3 第1回展を開く。
(2)巴里万国裝飾美術工芸博覧会受賞者 I 大 賞 「蒔絵置物台」三上治三郎、「漆器料紙文庫」 土山公主、「七宝、宝石箱」稲葉七穂、「唐草紋花 瓶」井本米泉、「綴錦卓掛」川島甚兵衛、「カー テン地」龍村平蔵、「錦地唐織」野淵亀吉、「羽二重 縷縷窓掛」湯浅専太郎、「綴錦壁掛」山鹿清華、 「人形」清水勝蔵 II 名 賞 「漆器手元棚」戸島光孚、「竹製漆器巻簾入」 佐々木徳斎、「描更紗卓子掛」西村治兵衛、「刺繡 六曲屏風」高島屋呉服店、「刺繡群雀額面」田中 利七、高島屋呉服店出品協賛人林震次郎、川島甚 兵衛出品協賛人沢部清五郎、同矢谷久之助、同松 宮善助、「人形」大木平蔵 III 金 賞 「蒔絵手箱」迎田秋悦、「蒔絵手箱及硯箱」岡 本専助、「漆器宝石箱」西村彦兵衛、「象嵌簾入」 駒井音次郎、「花瓶」平岡利兵衛、「額皿」浮田染 徳、「高杯」河村蜻山、「音羽焼額面」清水六兵衛、 「刺繡類及クッション」箸尾清、「唐織錦」伊達弥 助、「刺繡四曲屏風」西村総左衛門、田中利七出 品協賛人瀧川呉雲、同村田末吉、同伊藤巖、「人 形」並河忠次郎、「友仙着物」高島屋呉服店、「日 本婦人服」広岡伊兵衛、「図案額」京都美術工芸 学校、「染織物」京都高等工芸学校 IV 銀 賞 「漆器硯箱」岩村貞蔵、「青銅香炉」秦蔵六、 「花瓶」内島北朗、「同」宇野仁松、「同」清風与 平、「唐草室内裝飾地」長谷川市三、「刺繡着物」 杉本松之助	この年 ▷ 日本プロレタリア文芸連盟美術部創立。 ▷ 里見勝蔵、「マリーヌの記念」など滞欧作 を二科展(第12回)に出品、樗牛賞を受ける。 ▷ 梅原龍三郎・岸田劉生、春陽会展覧会の後、 同会を脱退。 ▷ 北大路魯山人、星岡窯を北鎌倉山崎に築く。

大14(1925)年

京	都	府
<p>せん。……純粋な一私塾の月次研究会の延長に外ならないので私達各個のもつ芸術に生きよう、とする一念より外何らの意味を含むものではありません。しかし、そこに私達青春の残してゆく魂の画像であり、其所に他の立派な展覧会とは異った意義と未知の将来とを持つものと存じます」という。木村斯光「立花」、大河内夜江「八瀬早春」、登内微笑「白狐」、菊池契月「春風私絃」など出品。 大毎美術 4:7、都市と芸術 122、141</p>		
<p>6・一 日本自由画壇、久保寛・佐々木千早を壇友に推薦。 京都に於ける日本画史</p>		
<p>7・27 都路華香・菊池契月、帝国美術院会員となる。 華香墨蹟、日本芸術院史</p>		
<p>8・2 京都画壇の鳥居道枝・田中紅園・森川青坡ら、研究会を結成。 大毎美術 4:9</p>		
<p>8・10 美術工芸界功労者 吉田忠三郎没(享年50)。 ☆</p>		
<p>9・19~23 安井曾太郎個展、画箋堂に開催。 日本美術大年鑑 1926</p>		
<p>9・一 太田喜二郎、市立美術工芸学校教員を嘱託される。 太田喜二郎遺作展図集</p>		
<p>10・11~27 第4回日本南画院展、岡崎勸業館に開催(一般受付総数587点、入選点数54点、水田竹圃「祝島早春」など)。日本美術大年鑑 1926</p>		
<p>10・14~18 里見勝蔵および川島理一郎、各滞欧洋画展、府立図書館に開催(里見はフォーブ派の作品など70余点、川島は約150点を出品)。 日出 10:15</p>		
<p>10・15~11・15 第2回京都美術工芸会展、第2勸業館に開催(667点、市主催)。 同上</p>		
<p>10・16~11・20 第6回帝展⁽¹⁾(11・27~12・11京都陳列会を岡崎勸業館に開催)。日本芸術院史</p>		
<p>10・31~11・14 第12回二科会京都陳列会、岡崎勸業館に開催(出品総数約200点、彫刻10余点、津田青楓「蔬菜園」・(日本画)、安井曾太郎「柿実る頃」など、また二科会主催で、はじめて美術講演会を三条青年会館に開催、講師石井柏亭・藤川勇造・黒田重太郎)。 日出 10:28、11・1、日本美術大年鑑 1926</p>		
<p>11・8 京大美学会、文学部第10教室に開催(講演「大英博物館所蔵顧愷之筆女史箴卷に就て」福井利吉郎、「中世の音楽観を示す二三の文献に就て」須永克己、なお同上の画卷模写「小林古径・前田青邨筆」が展示される)。 日出 11:4</p>		
<p>11・12~22 第5回自由画壇展、⁽⁴⁾岡崎公会堂に開催(総出品数48点、「八瀬大原」井口華秋、「洛遠遙」林文塘、「帝陵四題」上田万秋、「橋五題」松村梅叟、「近江八景」庄田鶴友、「願い」広田百豊など)。日本美術大年鑑 1926、書画骨董雑誌 210</p>		
<p>11・20~28 第2回淡交会、東京三越に開催(竹内栖鳳「鷲」・「海」、山元春挙「冬の戦場原」・「獅子牡丹」など出品)。日本美術大年鑑 1926</p>		
<p>12・3 中村大三郎・山田耕雲・水田竹圃ら、帝国美術院美術展覧会委員となる。 日本芸術院史</p>		
<p>12・25 堂本印象「華巖」、帝国美術院賞をうける。 同上</p>		
<p>この年</p>		
<p>▷ 猪飼囃谷、市立絵画専門学校教授を退職。 日本美術年鑑 昭15</p>		
<p>▷ 山元春挙、兩陛下銀婚大礼御用「智仁勇」を揮毫。 都市と芸術 240</p>		
<p>▷ 山元春挙、在洛華族が依頼の兩陛下銀婚奉祝献上画に対して特に皇后陛下から親しく御指定の図題「裾野の秋」・「琵琶湖の春」対幅揮毫。 同上</p>		
<p>▷ 山元春挙、パリのルクサンブル博物館陳列「山村の雪」揮毫。 同上</p>		
<p>▷ 橋本閑雪画塾新塾会解散。大毎美術 4:9</p>		
<p>▷ 水田竹圃塾善我会、第1回展を開催。 同上</p>		
<p>▷ 神阪雪佳、装飾的な色漆絵を研究。 雪佳遺作集</p>		
<p>▷ 友禪、江戸中期紋様が流行。 友禪の変遷</p>		
<p>▷ 柳宗悦、同志社女子学校専門部教授に就任(また『木喰上人作彫刻』、『信と美』を出版、翌15年同志社大学英文科講師に就任)。 民芸40年</p>		
<p>この年ごろ</p>		
<p>▷ 上野為二、父清江の指導下に家業手描友禪の本格的な修業に入り、研究制作をおこなう。 日本美術年鑑 昭36</p>		
<p>▷ 日本画家 内海吉堂没(嘉永5生)。 原色明治百年美術館</p>		
<p>▷ 堂本印象、大徳寺竜翔院書院の襖絵・杉戸(「山水」・「葡萄」・「柳に鷺」・「仙人」など)を描く。 堂本印象</p>		

参	考	日	本
<p>V 銅賞</p>			
<p>「漆器硯箱」稲垣孫一郎、「銅製花瓶」永松佐次郎、「銅製香炉」古市卯之助、「鉄打出化粧具入匣」高瀬好山、「銅製花生及水指」雨宮宗七、「花瓶」伊東陶山、「同」諏訪蘇山、「飾壺」楠部弥一、「日本画」京都絵画専門学校</p>			
<p>VI 褒状</p>			
<p>「漆器喰籠」三木表悦、「青銅花瓶」西村安兵衛、「銅製花生」能川齋三、「銅鎚起額面」大久保猷興、「铸銅水壺」平野吉兵衛 京都貿易史、同博政府参同事務報告</p>			
<p>(3)第1回国画創作協会春季展出品</p>			
<p>(会員)小野竹喬「村道」、土田麦麿「舞妓」・「鮭と鱒」・「ヴェトイユ風景」(テムペラ習作、4点)。</p>			
<p>(会友)神原始更「崖と若木・其一」・「崖と若木・其二」・「燻魚」・「崖」・「日暮」、甲斐荘楠音「逃亡」・「貴姫舞」・「雛」・「習作」・「夕」、吹田草牧「摸写」・(ニッコロ=ジェリ二作「聖母戴冠」の一部)・「摸写」・(ジョヴァンニ=ダ=ミラノ作「基督復活」の一部)、粥川伸二「花下漫步」・「鴛鴦春夜情」、岡村宇太郎「猫の写生」、杉田勇次郎「風景」・「波切スケッチ」・「肖像」、伊藤草白「牛」 第1回国画創作協会春季展目録</p>			
<p>(4)第5回日本自由画壇展覧会</p>			
<p>池田桂仙「洛西、西芳寺林泉」・「永源寺煙雨」、井口華秋「八瀬の春」・「大原の秋」、林文塘「洛南逍遙」、西井敬岳「朝鮮金剛山」、渡辺公観「高原の秋」・「溪村の夕」、玉舎春輝「謡曲行脚」、上田萬秋「帝陵」、久保寛「ぶどう」・「静物」、松村梅叟「お人形の写生」・「虎の帽子台湾所見」・「西瓜」・「橋五題」、佐々木千早「白兔之図」、庄田鶴友「近江八景」、廣田百豊「願い」・「虎の図」、人見少華「藤」。 日本自由画壇展覧会図録</p>			

京	都	府
2・14 漆工家 10代中村宗哲没(享年65、尼宗哲)。 淡交テキスト 茶道具編		日出 6・11、都市と芸術 151
2・末 岸田劉生、京都の怠惰な生活を改めようとして、鎌倉長谷に転居。 岸田劉生		6・18~20 第2回菊池塾展、第2勸業館に開催(菊池契月「経政」、宇田荻邨「白鷺図」)。 都市と芸術 148、151
3・14、15 第3回青甲社展、岡崎京都商品陳列所に開催(西山翠嶂「唐崎の松」、堂本印象「歌人」)。 西山画塾 青甲社、都市と芸術 146		6・24~29 第1回東西会展、東京松屋に開催(京都からの出品画家は橋本関雪・西山翠嶂・西村五雲・土田麦懼・津田青楓・近藤浩一路・菊池契月)。 日本美術大年鑑 1926
3・20 小早川秋声、アメリカに出発(8月帰国)。 都市と芸術 146		7・5 市立絵画専門学校、市立美術工芸学校妙法院南今熊野の新校舎竣工式を挙げる。 日本美術大年鑑 1926
3・20 都路華香、市立絵画専門学校長兼市立美術工芸学校長となる。 華香墨蹟		7・一 新井謹也、陶磁器研究のため再び中国に渡り北京に滞在(9月まで)。 京都工芸大観
3・21 機織家 6代伊達弥助没(明11・3 京都生、享年49)。 日出 3・23		9・29 鹿子木孟郎、明治神宮絵画館壁画「奉天戦図」を完成。 鹿子木孟郎小伝
3・22 京都美術工芸会、京都美工院と改称。 日出 3・24		10・16~11・20 第7回帝展 ⁽¹⁾ (竹内栖鳳「南清風物」、菊池契月「赤童子」など出品)。 審査員は、先年と同じ顔ぶれである。加藤英舟・宇田荻邨ら薦推となる。徳岡神泉「蓮池」などが特選となる。11・27~12・11、京都陳列会を岡崎勸業館に開催)。 日本芸術院史
3・一 市立陶磁器講習所閉鎖。 京焼百年の歩み		10・29~11・10 第5回日本南画院展、岡崎に開催(水田竹圃「夏日湖畔」・「夏」など)。 京都に於ける日本画史
3・一 日本自由画壇、植中直斎の脱退を承認。 京都に於ける日本画史		10・30~11・15 第6回日本自由画壇展開催。 ⁽²⁾ 日出 10・30、11・9
4・17~21 第5回国画創作協会展、 ⁽²⁾ 京都倶楽部に開催(伊藤草白・岡村宇太郎・甲斐荘楠音・粥川伸二・榊原始更・吹田草牧・杉田勇次郎、第1部新会員に推挙される。伊藤柏台・小松均・佐原修一郎・半田鶴一・丸岡比呂史・森谷南人子・福田豊四郎、第1部新会友に推挙される。第2部においても、平塚運一らを新会友とする)。 出品点数51点、内訳:会員10、会友13、入選28。この内版画3点をふくむ。洋画梅原龍三郎・川島理一郎。樗牛賞:佐原修一郎「静物」。国画創作協会奨学金 小松均・玉城末一。なお第2部の出品点数は78点)。 日出 4・18~		10・一 山元春挙、仏国からシュヴェリエ・ド・ラ・レジョン・ドノールを贈られる。 都市と芸術 240
4・一 柳宗悦、河井寛次郎・浜田庄司らと共に高野山に旅し「日本民芸美術館設立」の計画を企画。 民芸40年		10・一 津田青楓、津田青楓洋画塾を東山霊山13番地に開催(幹事宮川文学士)。 日出 10・27
5・8、9 三条会展、京都美術倶楽部に開催(九里道柳子「沼畔静日」、津田青楓「籠之蔬菜」、近藤浩一路「潤水」、岸田劉生「野菜図」など)。 日出 5・9		11・8 宇田荻邨「淀の水車」、帝国美術院章をうける。 日本芸術院史
5・15~20 関西美術会展、京都商業会議所に開催(入選油絵70点、工芸20点、同人作品50点を展示、太田喜二郎「森」、里見勝蔵「オランピア」、沢部清五郎「新緑の森」、梅原龍三郎「裸婦」、安井曾太郎「風景」。今回、新たに川端弥之助・里見勝蔵が委員となる)。 日出 4・23、5・16、19-21		11・一 藤井有鄰館創設(藤井善助蒐集の東洋古美術品を保存展観)。 日本美術年鑑 昭42
6・5~7 第4回青竹会展、岡崎公会堂に開催。 日本美術大年鑑 1926、都市と芸術 151、日出 6・5		この年 ▷ 日本自由画壇、この年から春の試作展を中止し、秋の展覧会のみ集中。 日出 2・24 ▷ 村上華岳、国画創作協会を脱退(以後一切の団体から完全に独立する)。日本美術年鑑 昭15 ▷ 富田溪仙、ポール=クローデルとの合作詩画集『四風帖』・『雉橋集』成る。 富田溪仙遺作展目録
6・10 図案家 下村玉広没。 近代友禅史		▷ 井口華秋、西山翠嶂と西村五雲のあつ旋で竹杖会に復帰。 日本美術大年鑑 大15
6・11~13 第27回早苗会、岡崎勸業館に開催(川村曼舟「観瀑」、案本一洋「朝長懺法」)。		▷ 山元春挙、東京より献上の画帖揮毫。 都市と芸術 240

参	考	日	本
(1)第7回帝展(京都関係のみ) 審査員 (日)木島桜谷・(日)西山翠嶂・(日)川村曼舟・(日)西村五雲・(洋)太田喜二郎・(日)野田九浦・(日)山内多門・(日)吉川靈華・(洋)三宅克巳・(日)飛田周山・(日)平福百穂 会員出品 竹内栖鳳「南清物語」、山元春挙「深山の冬」、菊池芳文「赤童子」 審査員出品 木島桜谷「遅日」、西山翠嶂「夕」、川村曼舟「移る潮」、太田喜二郎「初秋の朝」・「庭に立つ女」 委員出品 中村大三郎「ピアノ」、上村松園「待月」、堂本印象「雪遊び」、福田平八郎「朝顔」 無鑑査 金島桂華「蓮池」など 特選受賞者 徳岡神泉「蓮池」、大河内夜江「秋の大原」、宇田荻邨「淀の水車」、村田勝四郎「女性」、松田尚之「姿」 日本芸術院史		1・24~28 京都画壇代表作家展覧会、都市と芸術社主催にて東京松屋に開催。 1・一 安井曾太郎、燕巣社の同人となり第1回展に「松林」・「ダリア」・「画室」・「京都郊外」を出品。 2・24~3・19 国画創作協会第5回展、日本美術協会に開催。 2・24~3・21 光風会第13回展。 2・27~3・20 春陽会第4回展。 5・1 東京府美術館落成。 5・1~6・10 第1回聖徳太子奉賛会総合展、 ⁽⁴⁾ 東京府美術館に開催(栖鳳「蹴合」、御舟「昆虫二題」、岡田三郎助「掛をかける女」、藤島武二「芳蕙」、高村光太郎「老人の首」・「なまづ」など)。 5・15~24 木下孝則・小島善太郎・前田寛治・里見勝蔵、1930年協会結成。第1回展、日米ビルに開催。この時新帰朝の佐伯祐三、会員に加入。 6・21 津田信夫・香取秀真・板谷波山ら、日本工芸美術会結成。10月第1回展を開く。 9・4~10・3 第13回院展、東京府美術館に開催(古径「機械」、竜子「使徒所行讃」)。 9・4~10・4 第13回二科展、東京府美術館に開催(有島生馬「岬と海水場」、津田青楓「籐椅子の裸婦」、佐伯祐三「壁」など)。 9・一 斎藤素蔵、日名子実三ら帝展を脱退して構造社結成。昭2・9第1回展。 10・16~11・20 第7回帝展、東京府美術館に開催(「百穂「荒磯」、吉川靈華「離騒」、和田三造「羽衣」、田辺至「裸婦」。第2回院賞:山口蓬春「三熊野の那智の御山」、宇田荻邨「淀の水車」、青山熊治「高原」、安藤照「大空」に)。	
(2)国画創作協会第5回展覧会 第1部 日本画 「農婦」・「聖コンタンツア寺」入江波光、「長門峡」小野竹喬、「罌粟」・「舞妓」・「大原女」・「鮭と鱒」土田麦懼、「松山雲烟」村上華岳、「水汲みに行く女」野長瀬晩花、「蓮」榊原紫峰、「花鳥」岡村宇太郎、「南の女」甲斐荘楠音、「衣笠山」吹田草牧、「樹影懷夏」杉田勇次郎、「長崎懷古」粥川伸二、「丘」・「庭」・「林」・「崖」榊原始更、「黒部溪谷」伊藤草白、「鬪鶏」三岡明、「宇吉」玉城末一、「秋林」・「夕月」小松均、「海ぞいの村」多田敬一、「冬の里」森谷南人子、「菱の池」丸岡比呂史、「かれい」猪原寿、「鉾山」柴田春光、「山茶花を持てる女」石川利治、「深草風景」要樹平、「漁村」高山精華、「観音山風景」於川篤、「ダリア」池田洛中、「早春野趣」福田豊四郎、「水辺静日」半田鶴一、「静物」佐原修一郎、「あみ」丹野金示、「佐渡海府風景」恩田耕作、「風景」沢田実、「飛驒三原」小野朱竹、「宮浦の秋」小川栄太郎、「黄檗附近にて」伊藤柏台、「秋景」上田真吾、「兵営附近」平塚運一、「初夏の風」・「月の出」川上澄生。 同展図録		↗「秋晴」、久保寛「静物ぶどう壺」・「静物夏鮭」、佐々木干早「奈良郊外の秋」・「伝説石子詰絵巻」、和仁淵天崖「蘭舟入津」。 日本自由画壇展覧会図録	
(3)第6回自由画壇展覧会 池田桂仙「雨歇煙迷」・「洛東修学院林泉」、井口華秋「踊子」・「金魚鉢」、林文塘「京の山」・「祭り」・「遅日」・「風景」、西井敬岳「越前風景」、渡辺公観「游鱗戯荇」・「帰帆」、玉舎春輝「瀬田川」・「麦秋」、上田萬秋「歌人の跡8題」、松村梅叟「賤の女3題」・「猩々」・「富士5題」、庄田鶴友「瀬戸内海3景」、廣田百豊「婦女十二題」・		↗「秋晴」、久保寛「静物ぶどう壺」・「静物夏鮭」、佐々木干早「奈良郊外の秋」・「伝説石子詰絵巻」、和仁淵天崖「蘭舟入津」。 日本自由画壇展覧会図録	
		(4)聖徳太子奉賛展 竹内栖鳳「鬪鶏」、山元春挙「畢波羅窟」、池田桂仙「夏谿煙雨」、橋本関雪「仙女図」、西山翠嶂「唐崎松」、川村曼舟「神苑」、庄田鶴友「日出」・「月の出」、水田竹圃「初夏」、榊原紫峰「鹿」、堂本印象「歌人」、福田平八郎「芍薬」、中村大三郎「聖徳太子」、小林観爾「立葵」、植中直斎「如意輪寺」、山下竹斎「北野の春」、平井樸仙「暖日」。 日出 4・24	